

社会学部報

第6号

2024

立教大学

社会学部報

第6号

2024

立教大学

社会学部報 第6号 二〇二四

目次

今日のお昼どうする？

——立教大学食堂紹介・・・5

就活のリアルとキャンパスライフ・・・12

立教社学生にアンケート・・・27

留学した学生さんにインタビュー・・・31

教員インタビュー・・・ 57

社会学部教員紹介・・・ 73

編集後記・・・ 78





ラーメン？

今日のお昼どうする？

からあげ？

立教大生のための
お昼ご飯情報！

学生生活を送る上でのお昼ご飯のヒントを掲載！
席の数からメニューの概要どのぐらいの時間でメニューが提供されるのか調査しました。
メニューの提供時間は12:30から食券の券売機に並びはじめ席に着くまでで計測しました。

うどん？

立教大学の学食
紹介します

第一食堂



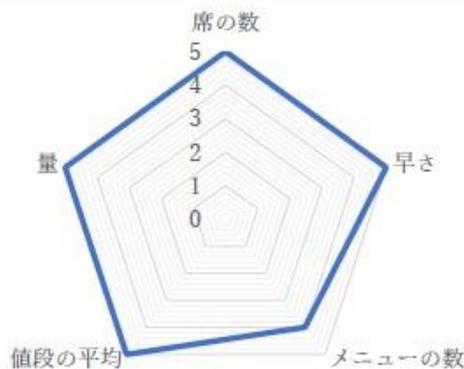
券売機で整理券を買ってから席に着くまでおよそ8分

麺類だと13分ほどと少し時間がかかりました。

席の数はおよそ200席以上。10席ワンテーブルのため、何人でも座りやすい印象でした。

また留学生も多い印象です。教授なども数名居て、みんなが利用しやすい食堂という印象を受けました。ハリーポッターの大広間のような開放的かつ荘厳な雰囲気のある食堂です。

またサラダや温玉トッピング、みそ汁、大盛り券など量を調整できるのも嬉しいポイントです。



一部メニュー (2023年11月現在)

カツ丼
親子丼
チキンカツ丼
スタミナ丼
ソースカツ丼
ロコモコ風ハンバーグ丼
カルビクツパ丼
カレーライス丼
ハヤシライス丼
タコライス

かけうどん
かけそば
たぬきうどん
きつねうどん
カレーうどん
ラーメン
シェフのおすすめ

など

9号館軽食堂



食券を買ってからメニューが提供されるまでが長いです。

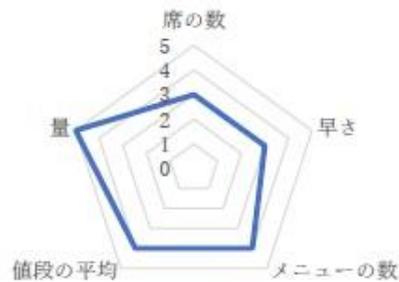
第一食堂の種類の待ち時間を除いて最長の13分でした。

メニュー全体的に他の食堂とは一味違うものが多いイメージです。全体的に野菜が多く、女子におすすめ！

少し混むのは覚悟で行きましょう！

アイスやお菓子、お弁当、飲み物なども売店のような形で販売されています。

コンソメスープなどもあるので小腹が空いた時にもおすすめです。



メニュー（2023年11月現在）

梅&わかめうどん
釜玉ぶっかけうどん
旨辛鶏そぼろうどん
関西風肉うどん
ネギ塩丼
スペシャル丼
本日のランチプレート

梅の和風スープごはん
坦々スープごはん
三ツ星パスタ
本日の押し麺
コンソメスープ
温玉トッピング
大盛券
など

レストランアイビー

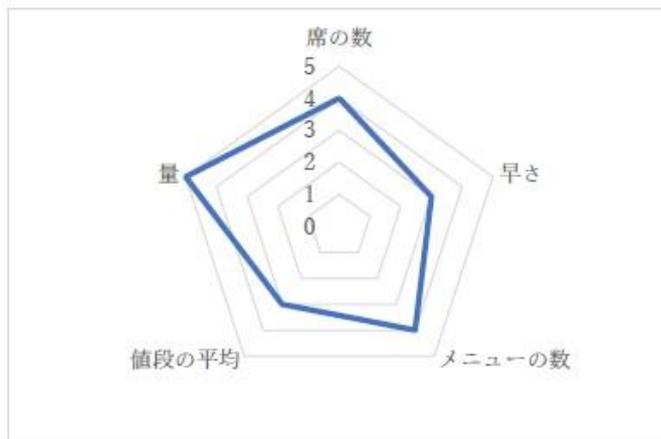


レストランアイビーは男女を問わず人気の学食です。

他にもカウンター席が 15 席ほど完備されており、スマホやパソコンの充電をしながらお昼を食べることが可能です。基本的にワンテーブル 4 席で満席ですが、5 分ほど待てば座れます。パン屋も併設されており、お財布に合わせてその日に食べる内容を決められます。13:00 を過ぎると食券をほぼ並ばずに購入できます。

自販機も充実しています。

併設されているパン屋ではハッシュドポテトなどパン以外のものも充実しています。



一部メニュー (2023 年 11 月現在)

アイビーランチ

立教健保ランチ

唐揚げランチ

特選唐揚げ丼

フェアメニュー

カレーライス

温玉カレー

醤油・塩・味噌・豚骨ラーメン

特選麺

わかめうどん

きつねうどん

かきあげうどん

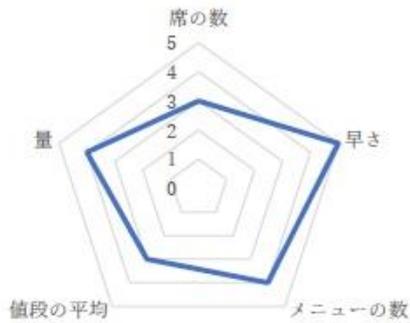
わかめそば

など

東京ハラルデリ&カフェ



東京ハラルデリ&カフェではハラル認証を取得した食事が提供されています。ハラルフードとはイスラム教の人々も安心して食べることのできる食事のこと。イスラム教では豚を食べてはいけなく、アルコール類の禁止など決まりがあります。誰でも安心して食事ができるハラルデリ&カフェに是非とも足を運んでみてください。



ほとんど全てのメニューがテイクアウト可能です。最初混み始める前までの提供時間は早いですが、混雑してくるとトンドールでナンを焼いている為、提供が遅くなります。混雑している時間だとかかなり時間はかかりますが、焼きたてのナンを食べることができます。ナンは顔よりも大きい！

カレー1種&ナン
 カレー2種&ナン
 カレー1種&ライス
 カレー2種&ライス
 カレー1種&チーズナン
 ローストチキン&ライス
 とりのからあげ&ライス
 ハンバーグ&ライス
 野菜いため&ライス
 ロコモコ丼デリ
 ビリヤニ丼
 ガバオ丼
 カオマンガイ

待ち時間は12:30から並び始めて7分30秒程。メニューはカレーと丼物中心。学内でまるで海外にいるような食事が楽しめます。

ラッシー (プレーン)
 ラッシー (ストロベリー)
 ラッシー (マンゴー)
 (※ラッシーはメニューの値段の平均には含まれていません)

ほとんどすべてのメニューがテイクアウト可能です。

Map

The map shows the Rikkyo University campus with various buildings and gates. Callouts indicate food and bento locations:

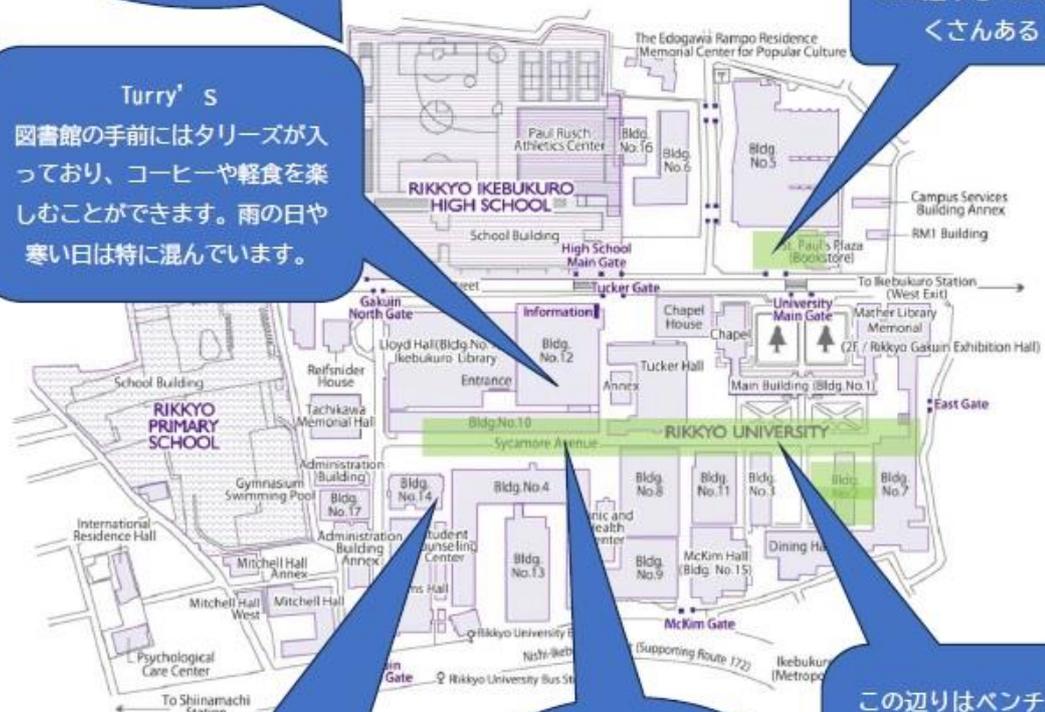
- St Paul's plazaの1階** (1st floor of St Paul's plaza): LAWSON is located here. It is near the school and has a variety of bento and snacks.
- FB1 レストランアイビー** (FB1 Restaurant Ivy): Located near the University Main Gate.
- 第一食堂** (First Dining Hall): Located near the East Gate.
- お弁当の販売があります。** (Bento is sold here.): Located near the University Main Gate.
- 9号館軽食堂** (Building 9 Light Dining Hall): Located near the University Main Gate.
- お弁当の販売やサンドイッチ他にも総菜パンなどが販売されています。品揃えが豊富です。** (Bento, sandwiches, and other total dishes like bread are sold here. The selection is rich.): Located near the University Main Gate.
- F2 ハラルデリ & カフェ** (F2 Halal Deli & Cafe): Located near the South Gate.
- ここでもお弁当の販売がされています。400円以内で買えるミニ弁当は大人気!** (Bento is also sold here. Mini bento for under 400 yen is very popular!): Located near the South Gate.
- いつもこの辺りでお弁当やアイビーで販売されているものと同じパンが販売されています。** (The same bread sold here with bento and Ivy is also sold here.): Located near the South Gate.

そのほかのランチスペース

そのほかにも昼休みにはお昼ご飯を食べられるように開放された空き教室などもあります！

Turry' s
図書館の手前にはタリーズが入っており、コーヒーや軽食を楽しむことができます。雨の日や寒い日は特に混んでいます。

この辺りもベンチがたくさんある！



1階が自習スペースになっており、飲食もできます。
自販機スペースにはチョコレートやおにぎりの販売もあります。

図書館に入る前のスペースは屋根がありベンチもあります。

この辺りはベンチがたくさんあって天気の良い日はお弁当を食べている人もたくさんいます。

就活のリアルとキャンパスライフ

―就活生にインタビュー① 佐藤杏奈さん（現代文化学科4年）

「就活って何するの？」そんな疑問と共に、学生生活について、就活生にインタビューをしました。インタールとは、取って良かった授業など、たくさん教えてもらいました！（学年は取材時）

じたので志望しました。

―ではやはり最初からメディア系志望だったのですね。

―なぜ立教大学社会学部現代文化学科を志望したのですか。

もともと文章を書くのが好きだったので報道とかに携わりたいたいというのは中高生のときから思っていました。あと、社会学部を選んだ理由の一つでもあるんですけど、中高生の頃から社会問題に興味があつて、そういったことを伝える仕事に携わっていききたいなと思いメディア系の仕事を目指すようになりました。

中高生の頃からメディア系の職に就きたいと思っていたので、そういう仕事を目指すなら社会学部がいいというのを知り、社会学部がある大学を探しました。その中でも、立教の現代文化学科は文化や都市、アート、環境などいろいろなことを学べて、他学科の科目も横断的に取ることが出来るところに魅力を感じ

―なるほど。社会的な興味と文章を書くのが好きというのがメディア系を志



望するきっかけになったのですね。

そうですね。

—では就活についてお聞きしたいのですが、就活とインターンは区別していましたが。それともインターン＝就活と捉えていましたか。

私はインターン＝就活と捉えていました。というのも、インターンにはアルバイト的な感じで採用している長期インターンと呼ばれるものと、選考につながる就活としてのインターンがあつて。私は長期インターンを1・2年生の時は全然見ていなかったのですが、3年生で「よし、就活始めるぞ」となって、まずはインターンに応募したという感じです。

—ではやはりインターンに参加してよかったところに就活として応募するって感じですか。

そうだね。そういったように体験的な感じで参加するという要素もあると思う。私が志望していた新聞業界では、インターンに参加した人のなかから早期選考に呼ぶというの結構あつたので、企業を選ぶために参加したというよりは、早期選考に参加するために応募しました。

—インターンはいつ頃から始めたのですか。

6月ぐらいに応募し、7月に書類・面接をして、実際に参加したのは3年生の8月でした。そのインターンは長期ではなく、2日間のものでした。

—出版業界や放送業界など、メディア系はインターンや就活の時期が他の業種に比べて早いと聞きますが、それは本当ですか。

うん、そうだと思います。それに動き出しが早い人が多い気がします。

—2年生の時にはインターンとかにはアンテナは張らずに、3年になってから「やるぞ」って感じでしたか。

はい、私はそうです(笑)でも、例えば新聞だったらアルバイトをできるところがあつたり、出版とかも1・2年のうちからできるインターンとかもあると思うので、もし興味がある人は、早めにそういうこともやっておいた方が後々有利になるのかなと、就活をやってみて思いました。

—就活をする中でこの業界ならではのと思ったことはありますか。

他の業界をあまり受けていないのでよく分からないけれど、選考の過程で実践的な課題が多いと思いました。例えば、

私が受けたところだと、論文試験と時事問題がありました。他の新聞社や通信社では、地方に行つて実際に取材をするといったこともありました。そういう実践的なところは他と違うかなと思います。他の業界だとはじめはSPIなどで選考されるところが多いと思うんですけど、それよりは、ちゃんと志望理由を持つているか、どういう取材したいのかっていうのが最初の選考の時からすぐ聞かれることですね。たぶん、出版・広告でも選考で実践的なアイデアを出すとかがあると思う。

—では、参加したインターンでも実践的なことをしたのですか。

そうですね。私の場合は模擬取材をして、それをもとに実際に記事を書くということをしました。書いた記事は記者の人に添削してもらいました。

—インターンは何個ぐらい行つたのですか。

あー(笑)、応募した会社は結構あるんですけど、実践的な内容のインターンは内定先しか受からなかったです。

—就活は他にも色々行つていたのですか。

メディア関係と他の業種含めて10社ほどESを出しました。結局、早期選考で内定をいただいたので、そこに決めて就活を終えました。

—いつごろ就活は終わったのですか。

3年生の1月です。結構早い方だと思いますけれど、メディア系だと早期選考ではそのくらいに内定出るところも多いかな。多くの業界・企業では、4年生の春から夏にかけて本選考をやる感じだと思います。

—ちなみに、OB・OG訪問は行かれたことはありますか。

所属していたサークル(ジャーナリズム研究会)の先輩が、私が受けていた会社に入社していた人だったので、その方にお願ひしてESをみてもらったり、面接のアドバイスをもらったりしていました。

—さきほど、企業を選ぶというより選考に参加する気持ちでインターンを選んでいたとおっしゃっていましたが、インターンをする所を選ぶ基準は、自分の中であつたのですか。

はい。でも正直、私は選べるくらい受かつていなかったもので…。でも、やっぱり自分のやりたいことが出来るかどうかを重視して、とにかく報道に携われるところを受けました。

—就活で一番大変だったことはなんですか。

面接です。簡潔にかつきちんと思いが

伝わるように志望理由を話すこと、自分の経験に結び付けて自己アピールしつつ、聞かれたことに的確に答えることが面接では求められると思います。でも、そういうのはやっぱり練習しないと身につかないし、うまく返せないのも、そこにすごく苦労して面接練習を頑張りました。

―やはり、逆質問されることもあるのですか。

受けた会社の中には逆質問をしてくるところもありました。でも、そこはきちんと考えておくべきところなので、聞かれることを想定して準備していました。

―では、自己分析が重要になると思うのですが、どのように自己分析しましたか。

自己分析ちゃんとしていなくて（笑）

しっかりやっていた人は、テキストとかを使っていたのですが、私はそういうことはやらなかったです。代わりに、自分の経験のなかで軸になることをピックアップして、それを話せるようにするというのをやりました。例えば、私の場合だと、留学に行ったので留学のことと、ゼミのこと、あとはサークルでやったこととか。そういう大学生活の中で頑張っていたことをピックアップしてそのエピソードを書き出したりとか思い出ししてみたりして、それが面接にどう結びつくのかを考えて、話す練習をしていました。だから、自分の頑張ったことを洗い出して、それがどういうエピソードなのかを書き出すということはやったほうがいいと思います。

―1・2年生の頃から就活にも多少は目を向ける必要があるのかなと感じていたのですが、やはり、1・2年生の時は学生生活を充実させた方がいいと思いますか。

はい、私はそう思っています。例えば私の場合、就活の面接で留学やゼミ、サークルの話を結構したのですが、やっぱり経験がないと、説得力を持って話すことが難しいと思います。旅行や遊びでもいいと思うので、経験を増やしておくことはどの業界を指すにあたっても大事なのかなと思います。

―では、ここからは学生生活についてお聞きしたいのですが、アルバイトは報道に関わる仕事をしていたのですか。

いや、私の場合は、全然関係のない100円ショップで品出しやレジのアルバイトをしていました。

―それは、就活などは考えずに選んだということでしょうか。

そうです。コロナ禍でアルバイトを募集しているところが少なく、やってみ

たいアルバイトも募集がなかったの、
たまたま募集があったところで働き始
めました。出版とかメディア系関連のア
ルバイトをしている友達も周りにいた
のですが、私は留学でブランクができて
しまうので、ずっと同じところでアルバ
イトを続けていました。

—では、就活の面接などでアルバイトに
ついてアピールするとかはなかったの
ですか。

アルバイトで感じたことや働いて経
験したことを、志望理由や頑張ったこと
などに結びつけて話したりしました。

—ありがとうございます。では次にサー
クルについてですが、先ほどジャーナリ
ズム研究会に入っていたとおっしゃっ
ていましたが、このサークルに入った理
由をお聞きしたいです。

一番の理由は新歓に参加したときの
先輩の雰囲気良かったからです。メデ
ィア業界に行きたいから絶対ここに入
ろうという感じではなくて、行ってみた
ら雰囲気良かったから入ったという
感じです。記事を書いたり、社会問題に
ついて話し合うというような活動をし
ていて、そういうのも面白そうだなと思
いました。

—では、サークルの中で学んだことはど
んなことでしょうか。また、どのくらい
の頻度で行っていましたか。

基本的な活動は月に2・3回程行って
いました。半年に1回、記事を書いて機
関紙を作る時に、みんなで役割分担をし
て計画的に進めるといった、大人数で協
力して一つのものを作るといった経験は
勉強になったかなと思います。

—サークルに入っている人はやはりメ
ディア系を目指す人が多かったですか。
いることはいるけど、多いわけではな
いですね。学年で1人2人くらい。

—では次に報道系の業界を目指すうえ
で取っておくとよい資格とかがありませ
うか。

語学の資格は取っておいて損はない
と思います。必須ってわけではないんで
すけど、メディア業界、特に新聞業界で
は語学ができる人がとても多くて、TO
EIC800点以上は当たり前という
感じですよ。あとは留学経験のある人も
のすごく多くて、本当にそれは驚きまし
た。英語だけではなくて第二外国語でも
資格とか取っていたらアピールポイン
トになると思います。あとは、新聞業界
で言うと、ニュース検定を持っていると
時事試験が免除されることもあるので
良いと思います。

―佐藤さんはTOEICをいつ受験しましたか。

2年生の時です。私の場合は1・2年生の時にコロナで思うように活動できなかっただったので、暇なうちに受験しました。この時は2年生ながら就活を意識していましたね。

―では次に就活までの大学1・2年生の内にやってよかったこと、やらなくて後悔したことがあればお聞きしたいです。

まず、やっておいてよかったことは、サークルに入ったことや留学に行ったことです。授業やゼミとかやらなければいけないことを一生懸命にやってみると、それが意外と考えを深めることに繋がったなと感じたので、やるべきことをしっかりやっておくことも大事だと思えます。やらなくて後悔したことは、他のサークルに入ってみたりして、もう少し友達を増やしておけばよかったって

うのが1つあります。あと、アルバイトをいろいろやってみてもよかったかなと思っています。4年生だと新しくアルバイトを始めるのが難しいことが多いので、1, 2年生の内にやりたいアルバイトがあるなら挑戦してみるといいと思います。

―ゼミは大倉先生のゼミということですが、選んだ理由はありますか。

もともと大倉先生の環境政策論という授業をとっていて、それが面白かったのもっと環境分野について勉強したいというのが一番大きかったですね。

―大倉先生の授業はメディアに関わる内容も扱うのですか？就職を考えてゼミを選択したなどの理由はありますか。

就職に有利とかは特に考えずに興味関心で選びました。実際、ゼミの内容も

メディアのことにつながっていなくて、フィールドワークを通して環境問題やサステナビリティについて勉強しました。でも、就活の面接で「環境に関する取材がしたい」とゼミで学んだことを交えて答えることが出来ました。

―大倉先生の授業以外にとつて良かったと思う授業はありますか。

メディア社会学科のジャーナリズム論です。メディアやジャーナリズムの歴史、理念などを勉強する授業でした。あとは、メディア社会学講義も印象に残っています。その授業では日韓メディア比較の勉強をしました。海外のメディアについて勉強できてよかったです。多彩の学びは、自分の興味関心に従って、社会学部とは関係ない授業を結構とっていました。意外とそういった授業が、将来の就職先につながってくることもあるので、自分が普段やっている分野とは違

うことを勉強してみると役に立つこともあると思います。

—キャリアアップセミナーなどは行っていましたか。

参加したことはないです。でも、就活のどっかかりとして参加するのはいいかもしれないですね。例えば、志望する業界が決まっていなかったか、そもそも何がやりたいか決まっていなかった人は、そういった学校主催のセミナーに参加してみるのもありかなと思います。でも、業界が決まっている人はそういうのを活用しつつ、企業が開催している説明会とかインターンとかに参加した方が良くかなと思います。

—最後に、立教の後輩に伝えたいことを教えてくださいましたか。

まず1つは、自分の興味関心のあることを積極的にやってみて欲しいです。就

活とか将来のことを意識してやるというよりは、まずは自分がやってみたいことをやるのが1番だと思います。もうひとつは、怖がらずになんでもやってみることが大切だと思います。私は、もともと留学に興味はあったのですが、まさか自分が行くとは思っていなかったし、ちよつと怖いなって思っていました。でも、意外とやってみたらできるものなので、とにかく一旦やってみるといのは大事かなと思います。あとは周りの人を頼ることもすごく大事だと思います。就活を始めた頃、何もわからずネットで調べながらやっていたんですけど、サークルの先輩や教授が話を聞いてくれたりアドバイスをしてくれてすごく助かりました。

—貴重なお話、ありがとうございます！

(取材・編集 小口真柚 山本華愛)



―就活生にインタビュー②

羽飼風花さん（メディア社会学科3年）



―羽飼さんなぜ立教大学社会学部メディア社会学科を志望したのですか。

明確に決まっていたわけでは無いけれど、メディア業界に小さい頃から興味があって、出版とかに関心があった、っていうのから遡って考えた時にメディア社会学科が一番近いんじゃないかなと思ったからです。というのが建前の方で（笑）。本音の方は割と消去法かもしれない。絶対文系だったので、経営・経済は入ってから数学やらないといけないのでちよっと嫌だなって（笑）で、文学部か迷ったけれど、文学より

やれることの幅が広そうだから、社会学部にしたっていうのが本音です。

―3年生ということで就職はまだ決まっていないと思いますが、インターンはどういう業界に行っているのですか。

広告です。

―いつ頃からインターンは始めましたか。

応募が本格化したのは今年の6月で、行き始めたのは7月くらいからです。

―羽飼さんは、「インターンⅡ就活」と捉

えていますか。

最初はそう思ってたんですけど、意外とインターンから内定までは距離があるっていうか、マイソド的な部分でも、実際の過程の部分でも意外と距離がある。就活始めた頃はよく分からないから、インターン＝就活だと思っていたけれど、実際はあんまりそんなことないって今は思っています。

―インターンではどういったことをやるのですか。

どこも同じような感じで、企画体験みたいな感じ。例えば、こういう商品があるのでこれのプランニング案をグループで考えてくださいみたいな。で、条件とかが色々あったりなかったりって感じが多いです。

―インターン自体も選考があると聞いて

たのですが、そのあたりはどうでしたか。

全体的に難しいと思います。電通・博報堂・ADKあたりがすごい人気で、すごい倍率。でも、デジタル専業の所とかは行けるところもあります。―他の業界と比べてメディアならではのと思うことはありますか。

まず、ESとかがすごく大変(笑)例えば、他の業界だと志望動機400字と自己PR400字書いただけでもう書類終わりみたいなところもあるけれど、広告はフォーマットも自由で、自己PRしてみたいなやつとか、10年後どうなっているかを考えるみたいなのがあたりして、課題がとにかく大変です。

―どうしてメディア業界に行こうって思ったのですか。

メディア全体には、大学入試の時から漠然とした憧れがあつて。編集者とかの

ドラマを見てそういうのに憧れたっていうのと、雑誌とかドラマが好き、みたいにボヤつとあつて。広告いいなって思ったのは、GLっていう授業がきっかけです。1年生の時に、101を取っていたのですが、クライアントが東北博報堂さんで、初めて広告業界に触れて。それで広告業界の仕事というか発想の仕方について、実際にレクチャーを受ける機会があつて、広告面白いかもって思ったのがきっかけです。大変だけど、GLはやって損はないと思う(笑)その分、得るものも大きいって感じですよ。

―自己分析はきちんとやった方ですか。

うーん、最初の方はそれこそいろいろな形式に沿ってやったりもしたけれど、結局就活を通して自己分析した感じですよ。

―でも、羽飼さんの場合は明確に広告に興味があるってわかっていたのですね。

うん、逆に割とそこに合わせに行っている感じもあるんですけど、まあ、志望が決まっているからいいかなっていう。

—資格等は取得していますか。

中国語をずっと履修しているから、中国検定は取っているのと、秘書検定は昨年趣味みたいなレベルで取りました。

—TOEICは取得していますか。

取ろうと思って3年が経ちました(笑)でも、本当に就活で使えるのは、800とかそれぐらい持っている人。それに、意外と問われないかな。グローバルに行きたい・海外に転職したいですとかならいると思うけれど、別にそうじゃない会社ならそんなに問われないと思う。

—OB・OG訪問はしましたか

はい。基本的に、OB・OG訪問の時に使うアプリで、直接アポ取る感じ。私は最初怖かったから、年が近い女性の方を訪問させてもらいました。向こうがすごく優しいから、大丈夫だよ(笑)

—学校で催されているOB・OGイベントには参加しましたか。

うん、3年の夏に1回行きました。めちゃくちゃ企業があつて、自分がいきいたところを3講演分くらい回る感じでした。

—1・2年生ではあまり就活を意識していませんでしたか。

いや、2年生で3社くらいはインターンに参加したりはしたし、ずっと意識はしていました。でも、意識と実際は結構違うなって思いました。

—では1・2年生の頃から少しはインターンとか参加した方が良いと思いますか。

まあ、なんともいえないな。別にやっておけばよかつたとも思わないし。後輩の2年生が「やらないと」って言うつてると、「まだ遊んどきな！」って返すから(笑) 3年からでいいんじゃないかな。「就活のために2年からSPIやります！」とかより、自分が取りたい、しようもない資格取ったりとか、遊びに行ったりとか、サークルやったりとかした方が絶対いいと思う。

—では次に「メディアインターンシップ入門」についてですが、企業担当者と話し合うというのは、具体的にどういったことをするのですか。

砂川先生が主催なんだけれど、その先生はそっちの方面に顔が広い方なので、

砂川先生と繋がりがあられる方が毎年来てくださる感じ。実際、NHK・朝日新聞の人とか一通りメディア業界の話の聞きました。

—メディア業界はこういうことをしますよ的なお話を聞いたということですか。

—というよりは、就活の心得みたいな話でした。就活をどう進めるべきかみたいな。

—そのお話はやはり役に立ちましたか。

—そうですね。割と周りより3年の最初の方から本腰を入れて就活をやっていたのは、この講義のおかげだと思います。

—では、この授業は何年生で取るべきだと思いますか。

—私は3年生で良かったと思います。でも抽選ですよ。

—うん、だから運だね(笑)

—砂川ゼミもあると思いますが、羽飼さんはどの先生のゼミに入っているのですか。

—メディア・コミュニケーション論の、木村忠正先生のゼミです。

—どういう基準で決めたのか教えてください。

—私は割と芸術系にも関心があるから、現代文化学科の小泉先生のゼミとめっちゃ迷った。でも、やっぱりメディア社の中のゼミで関心があるものって考えた結果、音楽社会学の井手口先生とソーシャルメディア研究の木村先生に絞って。それで、音楽社会学はさすがに幅が狭す

ぎかなと思いい、木村先生にしました。あとは人柄かな。

—ちなみに、「メディア調査実習入門」は履修しましたか。

—うん、取った。いっぱいあるから、一概には言えないけれど、私は6つという、相澤先生の授業を取った。ウェブライティングの書き方を学ぶみたいなのやつは結構参考になりました。でも、課題が多いから、2年の間にとっておいた方がいいと思う。

—そこで学んだライティングの書き方はどういったところに役立ったと思いますか。

—めちゃくちゃ基本の文章の書き方を学んだのは、ESとかにも活かさせたし、あとはキャッチコピーとかの作り方を学んだのも結構面白かったかな。多分広

告志望の人は履修して損はないと思う。
— 今までの授業の中で面白かった・役に立ったと思ったものはありますか。

面白かったのは、社会言語学っていう授業。割と普段の生活で見られる事象を取り扱っていて面白かった。方言の話とかね。あと、ニュースの社会学³。綿井先生っていう、ウクライナ取材とかも現地でされていたジャーナリストの方が講師の授業で、ドキュメンタリー見ながらちよつと喋ってくれるみたいなのやっは、めちゃくちゃ勉強になった気がする。これまでに起こった事件とかを取り上げて、それに対する報道姿勢とか社会の反応みたいな、日常レベルに近いところを学べるのが楽しかったし、やはりそこが社会学の良さかなと思いました。役に立ったと思うのは絶対にGL。すぐにそこでの学びが自分の人生に生きてくるので。

—では、広告業界に行くにあたって役に

たったと思う授業はありますか。

マーケティング系の授業は一通り取っておいて損はないと思う。知識としてね。社会学部のメディア系はさ、全部マスというかテレビとかそつち方面の授業が多いじゃん？広告は割とマーケティング要素が強いので、マーケティングは全部取っておくと役に立つと思います。あとは、有名だけれど、広告・PR論。就活講座みたいな感じかな。

—広告業界を志望しているということですが、キャリアアップセミナーが主催のマスコミ講座は受けましたか。

はい、今受講しています。6月入会と9月入会があつて、6月に入っておくと、少しプラスの動画が見られたりするけれど、9月に集中講義があるので、そんなに変わらないと思う。今はもう講義自体は終わって、ESの添削とか個別にやってもらっている感じです。

—受講して良かったですか。

うん、お金はかかるけれど、取つてよかったと思つている。あれ取つて結構変わった気がするね。

—それも3年で受講する感じですか。

人によるかな。まあ、2年にとつておいたら3年でのスタートレベルはめっちゃ高くなると思うけど、ただ人は忘れてしまうので(笑) 2年で学んだ内容を果たして3年までそのまま覚えていられるかっていうと、どうなのだろうと思うところもあるから。でも、3年で受講していると、リアルタイムで学んだことを活かしながら就活できる気がする。

—では、少し話は変わって、学生生活についてお聞きしたいのですが、サークルは何をしているのですか。

SEELっていうサークルで、フリーペーパーを作っています。デザインしたり、文章書いたり、スケジュール管理、ディレクティングもしています。文化祭も盛況だったみたいです。

—どれくらいの規模感のサークルですか。

一応20人くらいいるけど、アクティビティが全員でないから、結果15人くらいかな。雰囲気もゆるゆるって感じで、うえーいじゃないよ(笑)。

—広告とかに興味がある人にとってはその活動も有意義な時間になりそうですね。

—そうだね、私はデザインスキルを身につけられたのはめっちゃ良かったなって思っています。別にデザイナー・クリエイター志望じゃないけれど、最低限は分

かっているのは、多分広告業界に入ってから、何も知らない人よりはいいかなって思う。

—デザインスキルっていうのは具体的にどういいうものですか。

イラストレーターとか、フォトショップっていうアドビのソフトがあつて、それを使ってデザインするんだけど、その一通りの操作ができるっていう。あと、意外と役立つ。それこそ、さつきESが大変って話したけれど、ESを書く時、「A4一枚で自分を表現してください」って言われたら困るじゃん？そういう時に、デザインができる結構役立つ。

—学生生活でやっておいてよかったと思うことはありますか。

—難しいな、でもGLかな。あとバイトもやっておいて良かったです。やっぱり

社会経験として働く側の大変さが分かったし。

—GLはなぜそんなに良かったと思うのですか。

5人くらいのグループでプランニングをやるんだけど、大学生活でそこまで1つのことに本気になる機会ってなかなかないと思っていて。まあ、文化祭とか大人数いて、なんとなくみんなでもやりましようみたいなのはあつても、5人全員、1人1人がアクティブユーザーじゃないと成立しない、とかは中々ないし、やっていることも勉強になる。プレゼンの組み立て方みたいなものも一通り学べた面でも良かったし、単純に友達的な面でもめっちゃ仲良くなったし、いろいろな面で総合的にGLは取って良かったと思います。

—留学は行きましたか。

—いや、行ってないけれど、来年どこか

行きたいなと思っています。まあ、ちょっと語学も兼ねながら旅行みたいな感じかな。元々そんなに海外に興味なくて周りが行っている、「あ、行ってるな」って思うぐらい(笑)旅行はしたいけれど、留学にはそこまで興味がなかったです。

—1・2年生でやっておくといえることはありますか。

あまり後悔はないけれど、強いて言えば今のサークルに1年から入っておけば良かったと思うぐらいかな。でも、コミュニティはあればあるほどいいと思う。私は最初コロナだったのもあって、今は多いけれど、属しているコミュニティも、1・2年の頃は少なかったのね。だから友達もそんなにいなかったし。だから、とにかくコミュニティを増やしておくのは良いと思う。サークルとかもいっぱい入っておいて損ないと思うし。とにかくコミュニティが多い方が色々充

実しているんじゃないかなと思う。その分疲れることもあると思うけれど(笑)
—最後に、後輩へ何かメッセージをお願いします！

真面目なことを言うと、高校までは何となくみんな部活入りなさいみたいな決まりがあったり、学祭もみんなで行きましょうね、みたいに「何かに取り組む場」が受動的に設定されていたと思うのでも、大学入ると全部自分が選び取るか否かになる。授業とかも、楽なものを取ろうと思えば全部楽なものを取れるし、コミュニティも「面倒くさいから入らない！」ってすれば、全部入らなくて済んじゃう。でも、そこで自分で色々やってみた方がいいと思う。なんでもいいからとりあえず入ってみたり、やってみたり。楽な道を選ぶよりは、ちよつと面倒くさい道を選んだ方が、意外といいことがあるかもよつて思います。だから、強制力がなくて自分で選べる分、色々やった方が実りのある4年間になるのではないでしょううか。

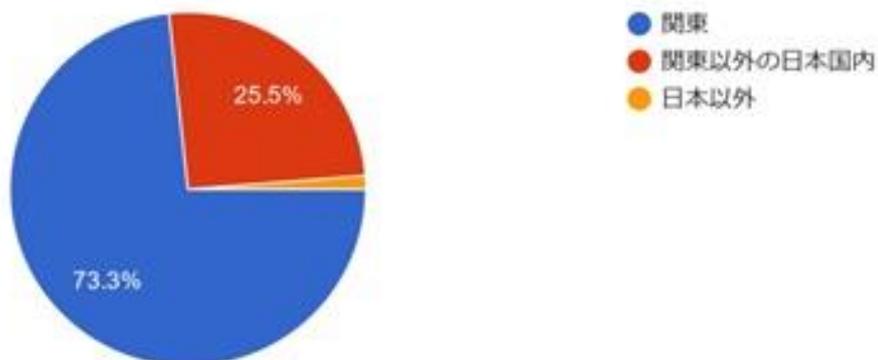
—貴重なお話、ありがとうございます！

(取材・編集 小口真柚)



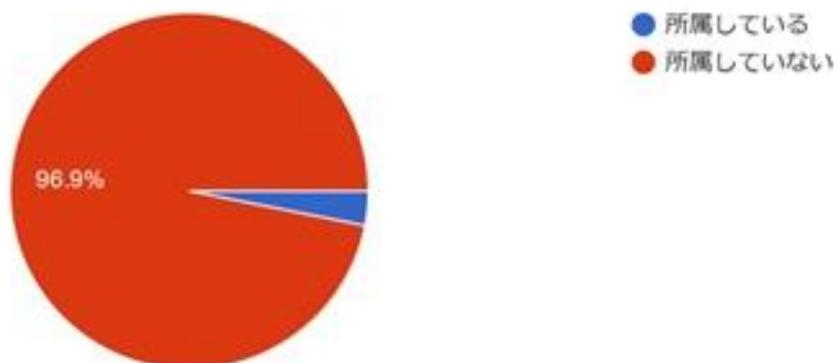


あなたの出身地を教えてください。

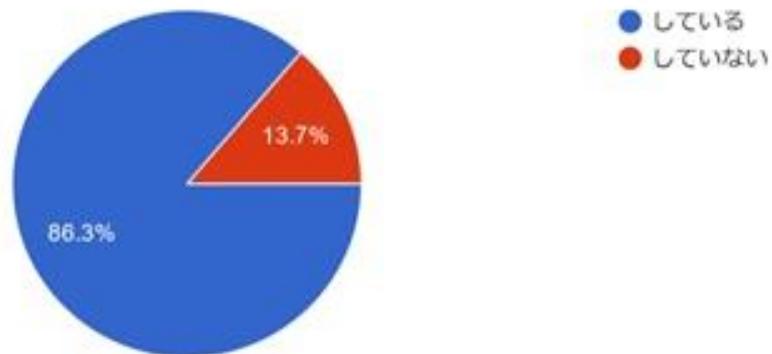


立教社学生にアンケート！

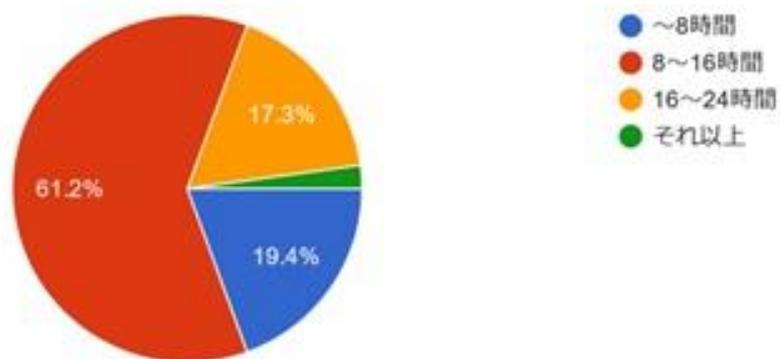
国際社会コースに所属していますか。



現在アルバイトをしているか教えてください。



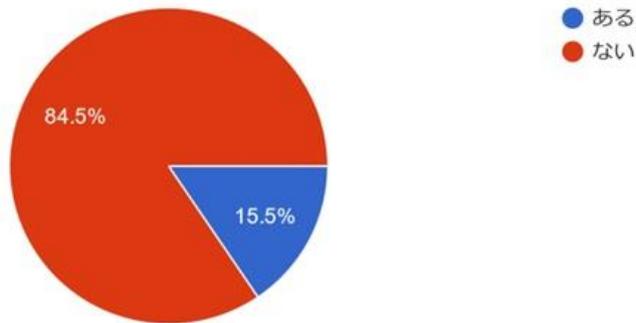
「アルバイトをしている」と回答した方に質問です。週に何時間程度していますか。



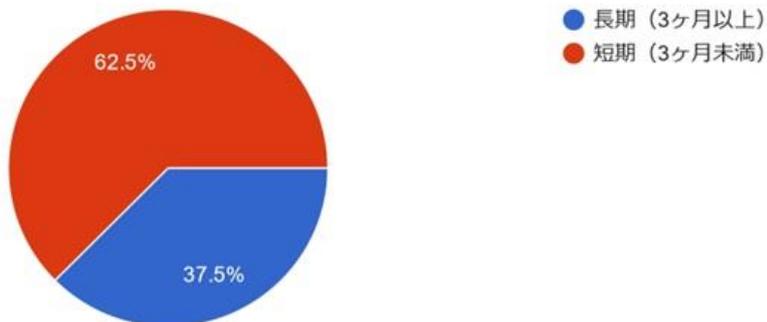
現在サークルに所属しているか教えてください。



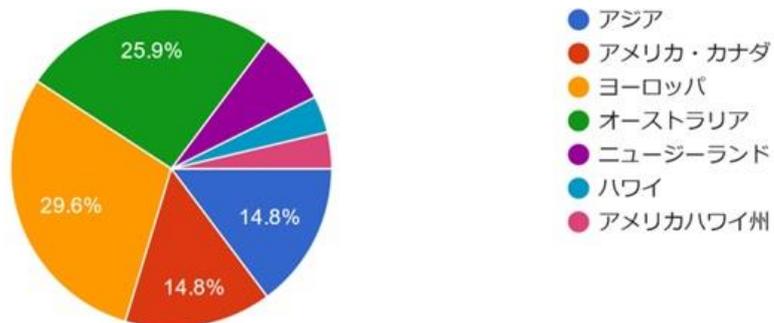
これまでに留学経験はありますか。



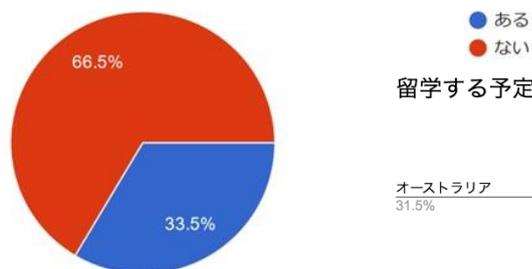
「留学経験がある」と回答した方に質問です。留学の期間について教えてください。



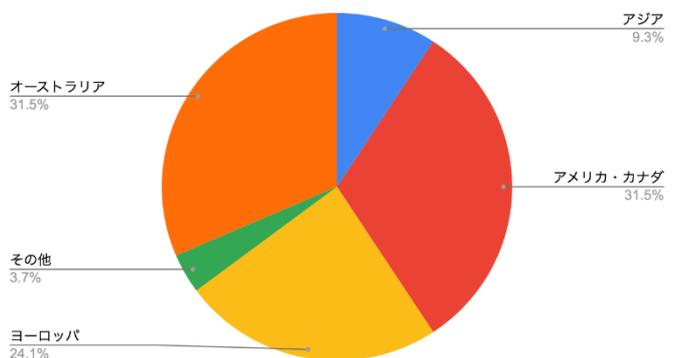
「留学経験がある」と回答した方に質問です。留学先はどこですか。



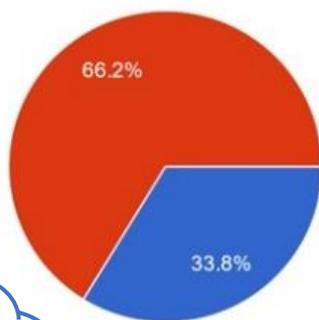
これから大学在学中に留学する予定はありますか。



留学する予定がある方は留学先はどちらを考えていますか。

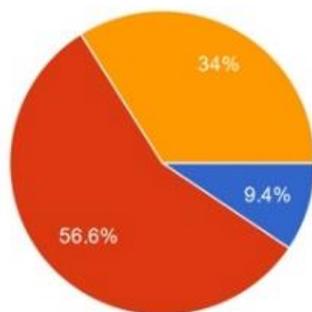


卒業後の進路について「就職」と回答した方に質問です。就きたい仕事が決まっていますか。



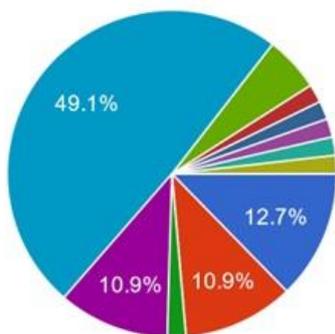
- 決まっている/ある程度決まっている
- 決まっていない

就きたい仕事を意識し始めたのはいつ頃ですか。



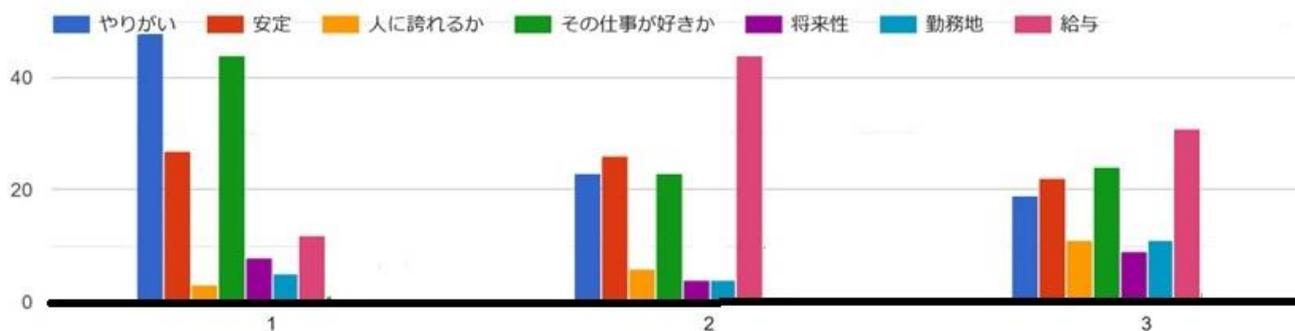
- 幼少期～小学生
- 中学生～高校生
- 大学生になってから

「就きたい仕事が決まっている」と回答した方に質問です。それはどのような仕事ですか。



- メーカー
- 商社
- 小売
- 金融
- サービス・インフラ
- 広告・出版・マスコミ
- IT・ソフトウェア・通信
- 官公庁・公社・団体

仕事を選ぶときに重要視しているものを三つ、優先順位をつけて選んでください。



留学した学生さんにインタビュー

— 小堀祐未さん



小堀祐未さんは、二〇二二年八月から十ヶ月間、アメリカのミネソタに留学されていました。今回、留学に役立つお話をたくさんお聞きしたので、ぜひご覧ください。

— 初めに、留学前の学校生活についてお聞きします。

一年生の頃に、フリーペーパーを制作するサークルに入って、早稲田大学の韓国交流などにも参加していました。ですが、コロナの影響でそうした活動が断ち切りになってしまって、特にサークル活動っていう活動をせずに四年生になったという感じですね。その代わり、ジェンダーやフェミニズムなどの勉強がしたくて大学に入ったので、その勉強を頑張っていたなと感じます。

―留学はいつ頃から意識されましたか。

大学一年生のときから、行きたいと思っ
ていました。ただ、初めはお金の問題
があったり、それから、コロナで入国自
体ができなかった時期もあつたりして
…。そのうちに友達がイギリスに留学に
行くことになって、自分も行きたいと思
うようになりました。メディア社会学の
ゼミに入っているのですが、そこで「留
学に行つてみたい人はいる？」と話が振
られたり、外部講師の先生が「外の世界
に行つて挑戦することは大事だね」とお
っしゃられていたのを聞いたりしたこ
とが、きっかけにもなりました。それと、
進路に迷つていたというのもあります。

―そうだったのでですね。留学先や期間は
どうされましたか。

留学先はアメリカにしました。それは
最初から決めていて、アメリカの映画と
かドラマが好きだったというのもあり

ますし、アメリカの文化の中で生活して
みたいという気持ちがありました。期間
は二〇二二年八月から二〇二三年の五
月までの十ヶ月間でした。学校を通じた
留学ではあるのですが、学費免除のない
現地の学費を払いながらの留学の形式
をとりました。また、学費のことや進路
との兼ね合いもあつて、休学留学にし
ました。

―留学前には、どのような準備をされま
したか。

今思えば、語学面での準備しかしてな
かつたなど、少し反省はあるのですけど、
NHKのラジオ英会話つてありますよ
ね。そのテキストを買つて毎日やったり、
TOFELの単語帳で勉強したりして
いました。あとは、好きだった海外ドラ
マとかを字幕を英語にして鑑賞して、あ
まり日本語を使わないようにしていま
した。

もう一つ、奨学金に応募もしました。
今は円安もあり、留学にあたってお金周

りのことは難しいところもあると思
います。立教のものでも、民間のものでも、
かなり条件の良い奨学金があるので、調
べてみて、根気よく色んなところに応募
してほしいと思います。

―留学先での食事はどうされていま
したか。

大学に食堂があつて、ただ、あまり口
に合わなかつたので、そこを利用しつ
つも自分でご飯を作つたりとか、友達と一
緒にご飯を作つて食べたりとかしてい
ました。外食は、普段はあまりしなかつ
たですね。旅行に行つた時にここぞとば
かりに食べていました（笑）

―留学先の雰囲気についてお聞かせく
ださい。

ミネソタに行つていたのでですけど、田
舎で、ほんとうに雪しかない。それに車
社会でした。もともと、アメリカは車社
会で、歩いてどこかに行くという発想が

ないので、そこはちよつと田舎だったことで、大変だったなと思います。良かったところは、大学を中心に成り立っているような町だったので、みんなの距離が近くて、アットホームっていうのかな。大学でも、ラウンジに行くと、おはようと言つて喋ったりして、距離が近づいたりしました。

—留学先での勉強や課題はどうでしたか。

留学当初、TOFELの点数が足りなかったんで、初めに語学学校に行くことになったんです。ただ、その内容が基礎的で、あまり刺激がなくて…。なので、現地のアドバイザーの方に、大学の正規の授業で取りたいものがあるので、移動させてくださいと直接頼みに行きました。もしたら、最初に受けたプレイスメントテストで、卒業要件のレベル5にいたので、「あなたは実力もあるし、やりたいことはつきりしているからいいよ」と言われ、現地のアメリカ人の

子とかがいる大学に入ることができました。それと、課題はとも多いんですけど、授業にもよりますね。文化人類学や民族、ジェンダーなどの授業を取っていたので、読むことやライティングも多くて、大変でした。一章三十ページぐらいを読んで、二百語でまとめる課題が毎週出て、その時は辛かったですね。それで、秋学期は実技の授業を取り入れたりして、日常生活と学校生活のバランスが取れるようにしました。

—言語面やそれ以外での苦労はありましたか。

これまで日本で過ごしてきた自分の精神的な年齢と、自分の言語力の年齢に最初はギャップを感じて辛かったですね。でも、だんだん慣れてきて、何をこう言ったらいいのかなども覚えていききました。英語力も伸びて、最後の方の頃は、当たって砕ける、みたいな英語を喋って生きていました(笑)あとは、友達とのコミュニケーションですかね。

言葉の問題もありますけど、その人がどういう人かというものが、やっぱりわからなかったり、文化も共有してないわけなので、つい言い過ぎたりとか、相手に合わせすぎてしまうこともありました。

—留学先での思い出をお聞かせください。

一番の思い出は、やっぱり友達ができただことですね。自分の素を出して、それを受け入れてくれる友達ができたことが、一番の思い出でした。



―留学を通して学んだこと、気付いたことはありましたか。

やっぱり、自分のやりたいことをやるべきですね。他人の意見を聞くことも大事だけど、結局、決めるのは自分だから。あとは、自信ですかね。自信はやっぱり、行動した時についてくるものだから、英語が喋れなくて嫌だとか、授業が怖かったりとか、友達ができなくて悲しいとか、その場ですつとできない、できないって言っているよりも、できなかつたらどうしたらいいかなとか、別の道を考えて、動いた先で自信がつくっていうことを学びました。

―最後に、これから留学をしたい学生へのアドバイスをお願いします。

やっぱり、周りの目とか、就活とか進路のこと、親とか友達とか、例えば、友達にインターンをやっているから、行かないかとかはあるけれど、でも、自分がやりたいなって思える、心惹かれる

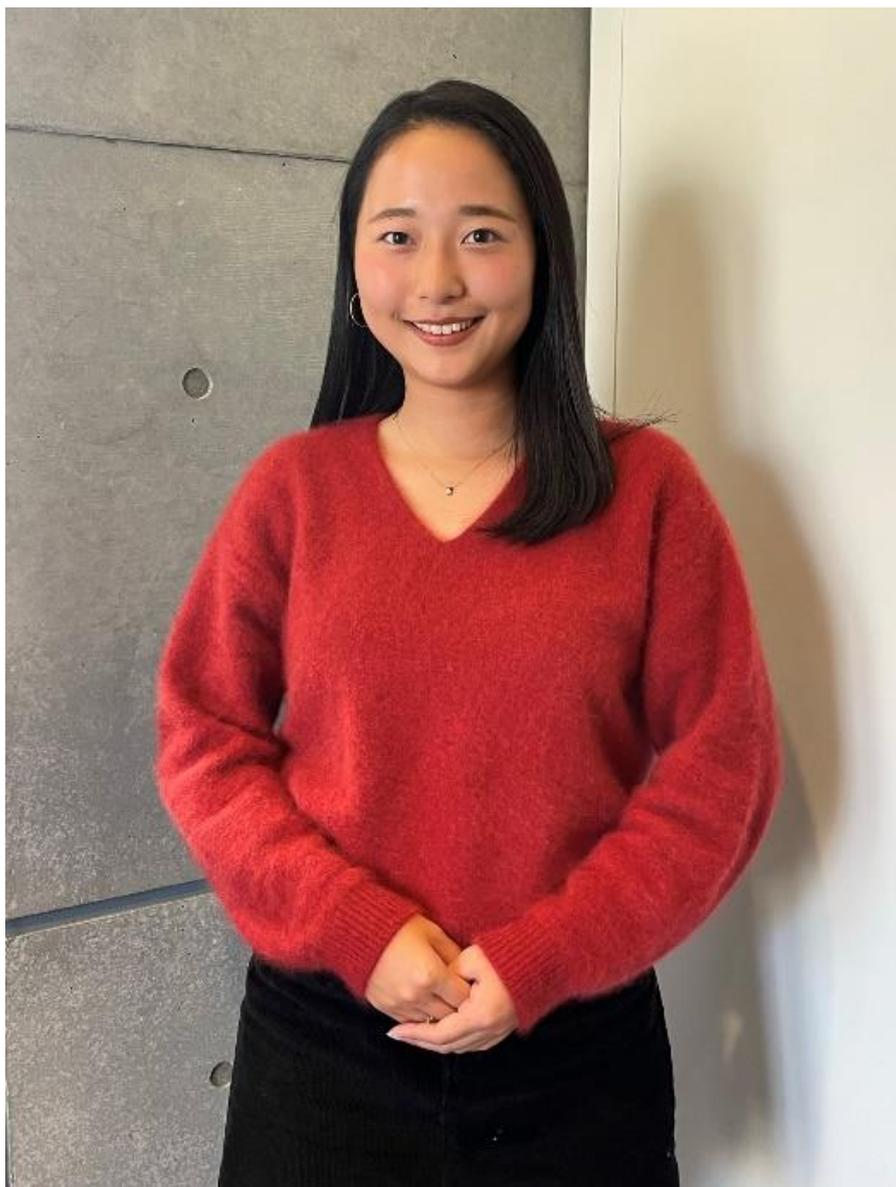
ことをやっていきましよう…っていうこと(笑)知らない場所で、自分のやりたいことを楽しんでやって、楽しい思い出を、記憶に残る思い出を作ってほしいなと思います。最後に、具体的なアドバイスですが、寮や大学の掲示物をこまめにみたり、大学のインスタグラムのアカウントをフォローしたりすると、自分の生活を助けてくれる情報を手に入れることができたので、活用してほしいなと思います。

―ありがとうございました。

(取材・編集 富田 玲衣)

留学した学生インタビュー

—— 染谷胡桃さん



— 染谷さんが留学した場所と期間を教えてください。

2022年9月から2023年6月まで約10ヶ月間、交換留学で、スペインのサラマンカ大学に行きました。

— 留学しようと思ったきっかけと留学を決めた時期を教えてください。

幼少期に、スペイン語圏のメキシコに在住経験があり、スペイン語には帰国後も慣れ親しんでいました。そこで、中高時代もスペイン語をやっています。大学は、留学制度が沢山あるということは姉から聞いていたので、大学に入ったら交換留学に行きたいなとは思っていました。大学1年生の9月末

辺りに出願がありました。そのため、夏休みから準備していました。

—スペイン（サラマンカ）に留学した理由を教えてください。

以前から学んでいるスペイン語を伸ばせたら良いなと思ったからです。メキシコや中南米など、スペイン語を話す国はあるのですが、訛りがあるので、将来的に考えてスタンダードなスペイン語を学んだ方が良いなと思ったので、スペインの大学を選びました。実際、スペイン国内でも訛りはあるのですが、私が行ったサラマンカという町は、大学都市でスタンダードなスペイン語を話すところだったのでサラマンカに留学することを決めました。

—留学に行くために使った制度を教えてください。

立教大学の全学共通の派遣留学制度です。大学入学の時から早めの段階で留学をしたいなと思っていたので、立教大学のSPIRITにある国際交流のところを見ていました。立教大学は、1年生の夏には出願しなければいけないことに気づき、焦って準備した記憶があります。

—留学行くまでに準備したことや頑張ったことを教えてください。

日本でやっているスペイン語検定「DELE」に合格することを目標にしていました。書く、読む、聞くは自分ができる範囲で勉強していました。しかし、話すテストの対策は1人で勉強するときに難しかったです。A1〜C2の全部で6レベルがあつて、高校時代にAレベルは取っていたので、Bレベル以上の勉強をしていました。留学が決まって、話す練習をしなくてはいけないとなつたときに中高時代のスペイン語の先生が東京にいらつしやつたので、連絡をとつて5回くらい会話中心のレッスンをやつてもらいました。後々知つたのですが、実は立教大学の先生なんですよ。

—留学して良かったことを教えてください。

日本人が私だけという知らない環境に身を置いて大変な中で生きていく力が身に付いたことだと思います。サラマンカ大学全体では世界各国からの留学生が多く、私が魅力に感じていた部分でした。実際、ヨーロッパ圏から来ている留学生が多かったです。しかし、私が所属していた地理歴史学部は、留学生が5人もいなくて、留学生が特に少ない学部でした。授業も、留学生1人で受けていました。最初は友達もいない状況で授業を受けていて、言語の壁もあり大変でした。そのような中で、言語ではなく、身振り手振りでも

コミュニケーションをとっていたことが授業の面での生きていく力が身に付いたのかなと思います。日常生活では、初めての一人暮らしを海外で経験して、自炊など1人で頑張つて良かったなと思います。

―留学中の一番の思い出は何ですか。

一番つて難しいですよね(笑)。記憶に新しいという感じなのですが、中高、大学の友達がヨーロッパ圏にたまたま留学していて、帰国直前にその友達と親が遊びに来たときに、スペインを完全に案内できたことが一番の思い出かなと思います。楽しんで帰つてくれました。初めて行く場所もあったので、1年かけて友達にご飯が美味しいところなどを聞いていたので、準備や実際に行つて楽しかったことも含め、思い出ですね。招待した友達、家族を楽しませられたことと、私がスペインでこんな感じで楽しんでいるよという

ことを伝えられたので一番の思い出です。



―想像と違ったことや実際に行つてみて気づいたことはありますか。

スペイン人学生と日本人学生の違いが結構ありました。スペイン人は、学習意欲が高いです。スペインの学生は、パーティー文化が盛んなので夜に出かけて勉強をやっているイメージがありませんでした。日本人は真面目だとよく言われているので、日本人の方が結局真面目なのかなと思っていました。

しかし、スペイン人はメリハリがあつて、授業のときはとても意欲が高いです。私が特に驚いた点は、授業中の発言機会が多いことです。先生の講義を聞く授業だとしても、結構先生が「これつてどう思う？」みたいな感じで聞いていました。私は、日本では社会学部で、何百人単位で授業を受けているので発言機会を作ることは難しいかもしれないのですが、それと違ってスペインでは多くても20人くらいの授業なので発言機会は多かったです。私は、大学に入つてから発言することに全然慣れていなかったこともあつて、どうしようということがありました。スペイン人は将来の仕事を据えて学部を選んでいるからこそ、意欲的な学生が多かったのかなと感じました。また、スペインの学生はバイトをしている学生が圧倒的にいないんですよ。私はバイトをできたらいなと思つているのですが、全然バイトをやっている人がいなくて。そもそも、スペインの雇用率が低いということを知りまし

た。だから、学生がバイトする機会がないんだなということが分かりました。そのこともあって、授業以外の学生の過ごし方の時間として、勉強している時間と夜に出かける時間がはつきりしているのかなと思いました。

スペインの私の学部は、朝の9時から夜遅くまでありました。夜遅くまで授業があるのは、スペイン人と日本人の生活習慣の違いだと思うのですが、スペイン人の生活は全体的に遅くて、大体みんな昼ぐらいい起きてくるので朝ご飯の時間も遅めで、昼ご飯の時間は14時くらいです。だから、授業は午後から受ける人が多くて、授業が終わるのが20時や21時くらいなんです。

—留学中大変だったことはありませんか。

印象深いことは、最初に授業に参加したときです。事前にスペイン語の準備はしていたのですが、実際に行ってみ

たらスペイン語の速さについていくことが大変でした。スペイン人はとても早口で、ずっと喋っているのので、先生が言っていることを聞き取ることが大変でした。聞き取れないと分かったときに、とりあえず授業を全部録音していました。家に帰ってから、聞き直して、授業中にとったノートを見ると、全然聞き取れていないということに気づいてやり直していました。授業をもう一回受けるみたいないな感じで、足りなかった部分を書き足していました。だんだん慣れてきて、1、2ヶ月目くらいで録音はしなくてよくなっていました。もう慣れていかないといけないと思います、録音をしないことに挑戦していた部分はあります。

—留学前後でスペインの印象は変わりましたか。

良い意味で変わらなかった気がします。スペインは、ヨーロッパの中では、南の方で暑いこともあってなの

か、前から、スペイン人は情熱的みたいなイメージがありました。実際に行ってみて、温かい人が多かったです。最初は、話すことをためらってしまったり、難しかったりした部分も「これってこう言いたかったの？」と聞いてくれました。また、私が言葉に詰まってしまったときも、他の話題になることなく、とても話を聞いてくれて、人を知ろうとしていることが伝わってきました。「日本」と言うこと結構親しみを持ってくれて良いイメージを持たれていると気づき、日本で良かったなと思いました。

—留学中の生活について(ホストファミリーとの生活や現地での学校生活について)教えてください。

個人部屋の学生寮に住んでいました。自炊もしていたのでほとんど一人暮らしみたいな感じでした。私が料理を意外と好きなことに気づいて、国が違う

とスーパーに行っても「この野菜何だろう」みたいなものが多かったです。だからスーパーの買い物も楽しかったです。食文化も合っていました。スペインは美食の町というのは結構有名だったので、食には困らなかつたと思います。安くて美味しい物を食べられるお店が多くて、特にサラマンカは学生街だったので基本的にお財布に優しいお店が沢山あったので食に関しては困りませんでした。

私が朝型だったので、授業は朝9時から授業をとっていました。専攻は地理学だったのでヨーロッパ地理学をとっていました。スペインの民族音楽やヨーロッパの美術史を学べる授業もとっていました。民族音楽の授業では、個展を見に行ったり先生が実際に楽器を持ってきて弾いたりしていました。美術史は、ヨーロッパ各地のカトリック教会の歴史を学べる授業でした。ヨーロッパはカトリック教会が発達している旅行で教会に行ったときに学んだことを実際に見ることができたので良

かったです。授業では座学で学ぶことが中心だったので、旅行で見に行くことができたことがとてもよかったです。

● 自作のパエリアとスペインオムレツ



—おすすめのスペイン料理はありますか。

スペインは、アヒージョが色々な種類があるんです。食材も様々だし、作り方も食材を揚げてから使うお店に対して、茹でた食材を使うお店もあったのでアヒージョはいろいろな食べました。

—留学に持って行くと便利なものはありますか。

私は、日本食と日本の筆記用具は持って行って良かったと思いました。サラマンカには、中国系の方がやっているアジア食材屋がいくつかあったのですが、売っている物は限られており、若干割高だったので、日本食は持って行けるだけ持っていった方が良いと思いました。私は、実際に日本の調味料一式持っていきました。私は自炊を頑張ろうと思っていたので、味噌、醤油、お酒、みりん：みたいな（笑）。インスタントも便利なので良いです。特に、おかゆを温めてすぐ食べられるものが持つて行って良かったです。行って二ヶ月目後半くらいの十月末に体調を崩したときがあって、そのときにおかゆがあったので助かりました。日本の筆記用具については、スペインに行つて日本の文房具の素晴らしさに気づきました。友達と貸し借りをしてみて実際にスペインで売られている文

房具も使ったのですが、シャーペンや消しゴム、ノートなど日本の文房具の性能が良いと思いました。

—留学してご自身で変わったと感じていることはありますか。

元々、内向的なタイプではなかったとは思いますが、日本以外の人々と触れてみて、私は本当に色んな人と喋れるんだなということに気づきました。自分の外交的な部分に改めて気づけました。色んな人とコミュニケーションをとる中で特に大事だと思ったのは表情や分かりやすい身振り手振りなど、言語以外の部分で人に伝えるのが大事ななと思いました。自分の新たな面に気づけたのかなと思います。

—これから留学に行く人、行こうと考えている人にアドバイスをお願いします。

私の場合は、在学留学で行っていたので、大学生活4年間の内、1年間をスペインで過ごしたことになるのですが、私は良かったなと思っています。一方で、留学に行くか迷っている人には、大学生活4年間という短い間で留学に行くことが本当に自分のやりたいことなのかということを考えてみて欲しいなと思っています。それが留学であれば、ぜひ挑戦してみたいなと思います。留学経験のある友達の話聞いても、後悔している人がいないです。私は、過去に海外在住経験はあるのですが、今回の留学は1人で行ってみる初めての機会でした。大学は独り立ちをする最初の一步なのかなど思っていて、そこで初めて1人で海外に行ってみてほしいなと思います。社会人になってからも海外に行く機会はあると思いますが、自分1人で解決しなければいけないことや他にも大変な部分が出てくると思います。大学は、チャレンジしてみても失敗してもやり直せる機会が沢山あると思います。

た。親からサポートされているからこそ、チャレンジできる部分があると思いますので、ぜひ留学はしてみたいと思います。

(取材・編集 黒川友菜)

●サラマンカのマヨール広場

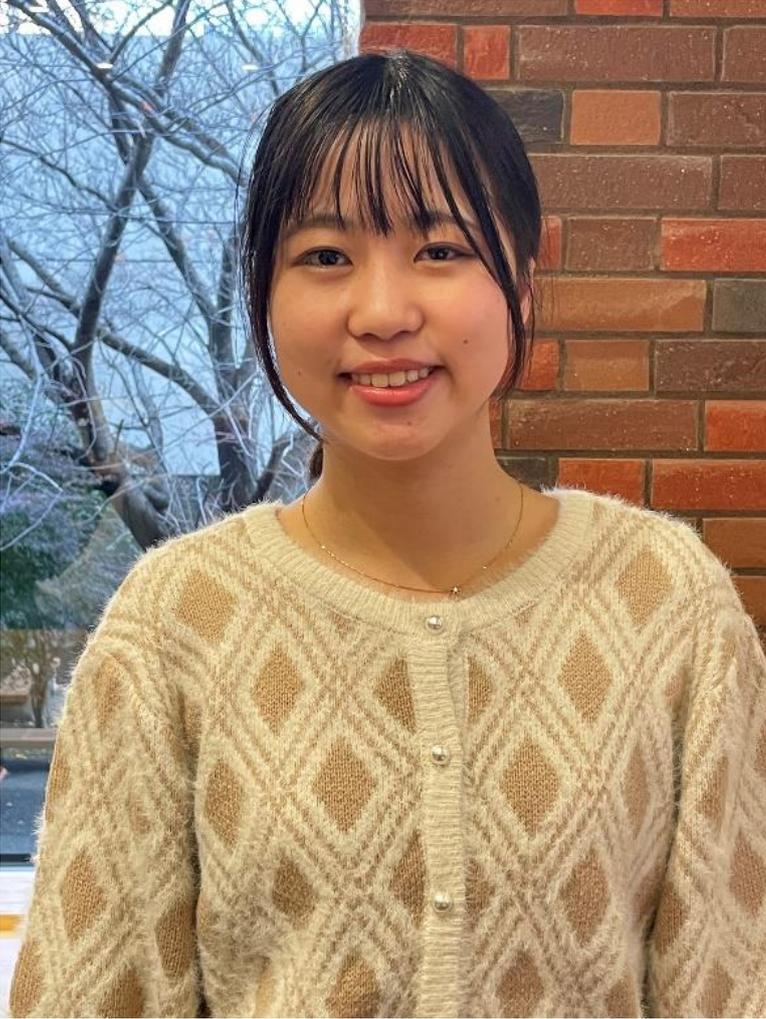




留学した学生インタビュー

グローバルスタディプログラム（シドニー）

—真島渚沙さん



—留学した場所と期間を教えてください。

オーストラリアのシドニーに1ヶ月間行きました。（2023年2月18日～3月20日）

—留学しようと思ったきっかけや留学しようと思った時期を教えてください。

大学に入学したときから留学に行きたいと思っていました。まず、個人で行くか、団体で行くかというところから考え始めました。社会学部のプログラムとして、シドニーに行くというものを見つけたので、授業

も兼ねて行けたら良いなと思い、参加を決めました。

―シドニーに留学した理由を教えてください。

高校のときにオーストラリアのブリスベンに2週間行き、オーストラリアの雰囲気がとても好きになりました。そのためまた行きたいと思い、シドニーには行ったことがなかったので、新しい場所として行ってみようと思いました。

―留学に行くために使った制度や参加までの流れについて教えてください。

留学参加までの流れは、1年生の夏にプログラムに関する説明会に参加し、秋学期前までに応募用紙などを書いて提出しました。参加が決定した後は、日本で事前授業を7回ほど受けて、シ

ドニーに関する知識や現地で行うプレゼンテーションの準備をして、実際にシドニーへ出発するという流れでした。

―留学に行くまでに準備したことや頑張ったことはありませんか。

シドニープログラムに行くためにまず、日本にいながら、英語を継続的に学べる環境に身を置きたいと思い、国際社会コースに1年生のときに応募して入りました。また、1、2年生のときに、大学の隣のアネックス会館で行われている英会話教室に通っていました。毎日少しずつ英語を喋ることを練習していたことは、頑張ったことです。英会話話は、1日40分くらい毎日できるものでした。毎日継続してできるので、前の日にできなかったことを次の日試してみようということができたので、留学に行く前に英語を話す準備をすることができたと思います。

―グローバルスタディープログラム（シドニー）の学生リーダーとしてはどのようなことをされていたのですか。

「シドニー立教会」というシドニーで生活をされている立教の卒業生がいらつしやいます。今回のプログラムを手伝ってくださっていて、その方と連絡をとってスケジュールを確認し、みんなに伝えることなどをしていました。また、入国のタイミングは、先生がいらつしやらなかったなので、みんなをまとめて一緒に行くみたいなことをしていました。

―留学して良かったことを教えてください。

自分にとって自信になったということが一番良かったことだと思います。1ヶ月間、海外で生活しているときの言葉は勿論英語です。その中で、ホスト

ファミリーや現地の人とお話することは、なかなかできる機会ではなかった。なのでそれをやりきったことが大きな自信につながりました。また、プログラムには30人くらいの参加者がいたので、大学の人も仲良くなれたことも良かったことかなと思います。

―留学中の一番の思い出を教えてください。

初日にホストファミリーの方とお会いして、その後に車で街を一周してもらったんです。そのときに見えた海がとても綺麗でした。「どうしよう」と不安だったのですが、その景色を見て「頑張れる気がする！」と思ったのが一番の思い出です。

―想像と違ったことや実際に行ってみて気づいたことはありますか。

実際は、現地の人がとても優しいということが自分の中では想像と違いました。海外の人は少しドライなところがあるのかなと個人的には思っていました。でも、行ってみたら、私がバス停を分からなくて聞いたときに誰でも答えてくれました。また、バスの運転が荒くて私がよろけてしまったときに、後ろにいた学生の方が「大丈夫？」と言って席を譲ってくれたりして人の温かさを感じました。自分の想像以上にとても優しいということが、良い意味のギャップでした。

実際に行ってみて気づいたことは、物価の高さのような、生活する上で大変な面があったということです。ペットボトルの水1本300円くらいしました。しかし、聞いてみたらオーストラリアの賃金は高いから大丈夫みたいです。慣れるまでは驚いていました。

―留学中大変だったことはありますか。

● 一番の思い出の景色



移動手段が大変でした。私は、大学に行くまで1時間くらいバスを乗り継いでいたのですが、移動方法に慣れるまで大変でした。また向こうの交通機関は時間通りに来ないことがよくあり、現地の人にバスの時間を聞いたり、グ

「グルマップを使って今バスがどこにいるのか確認をしたりしていました。また、大学でストライキがあり授業がなくなったことでプログラムのスケジュールが変わったことも印象に残っています。ストライキがあったことは私にとつて衝撃的で「そんなこと存在するんだ」と思いました。最後にみんなでプレゼンテーションをプログラムとしてやるのですが、その準備の大詰めくらいの時期に1日ストライキになったので大変でした。

「留学中の生活(ホストファミリーとの生活や現地での学校生活)について教えてください。」

平日は、シドニー大学の付属の語学学校に通っていました。午前中の授業は朝の8時から始まり言語の授業をみんなですべて受けて、午後はプレゼンテーションに向けたグループワークの授業を15時過ぎまで受けていました。放課後

は基本的にプレゼンテーションに向けた準備を1、2時間程度残してしていました。時間があるときは、みんなでショッピングモールに寄って、お土産を探していました。人によっては、ホストファミリーとご飯に行っていたと思います。休日は、1日フリーな日なので、ホストファミリーと出かけた日もありました。そのときは、近くにマナービーチという綺麗な地元人がおすすめというビーチがあったのでそこに一緒に行き、散策したりご飯を食べたりしました。また、一緒にプログラムに行った友達と水族館に行ったり海に行ったり、観光もしていました。

「立教大学のキャンパスと異なる点はありませんか。」

立教と同じ感じのレンガの建物があったのですが、規模感がとにかく大きく、広がってますね。大きな図書館や

美術館が大学内にあることにも驚きました。

「留学に持って行く便利なものがあれば教えてください。」



(シドニーの場合、)正直、現地で買おうと思えば買える物は結構あります。周りの人たちが持つてきて良かったと言っていたのは、日本食やお菓子です。少し寂しくなったときに落ち着くと言っていました。友達を持つてきていた物で印象に残っているのは、荳わかめやインスタント味噌汁です。

—留学して変わったことはありますか。

前に出て話そうということは今まではまりなかつたのですが、留学に行つて、頑張れたし、変わったので、他のことにも挑戦してみようという気持ちになれたことが変わったことです。小さなことですが、グローバルラウンジのイベントに参加しようと思ったり、来年度の学生に向けての説明会で自分の経験を話す機会があり、それもやってみたりしました。

外国人の人と話すことへの抵抗もなくなりました。前は、アルバイト先でたまに外国人が来ると「やばい！」とだいぶ焦っていたのですが、今は落ち着いてできます。

—これから留学に行く人や行こうと考えている人にアドバイスをお願いします。

もし、辛いことがあったとしても思い返してみたら自分にとってプラスなことになると思います。これを持ち越えられたから大丈夫だと思えるようになるので、留学に行くことは自分にとって大きなものになると思うので頑張つて欲しいです。私が行つた「グローバルスタディプログラム」のシドニーに関して言えば、グループワークでオーストラリアのことと日本のことについてプレゼンテーションをしました。国を超えて研究できることはなかなかできない機会なので自分にとって大きな

ことができたかと話せることにもなると思います。準備は結構大変だったので、その分、楽しいこともあるので頑張つて欲しいなと思います。

●ホストファミリーと



(取材・編集 黒川友菜)

留学生にインタビュー

— 呉雪顔さん

今回は中国から正規留学生として立教大学に来ている、ゴセツガンさんに社会学部生二人でインタビューしました。よろしく願いいたします。

聞き手2…国際学校の高校で、3年間ずっと日本語勉強してたってことだけど、留学するためにもう前から決めてたりした？

—まあ、そうね、中学2年生の時から。聞き手2…やっぱり、中国の留学支援って結構充実しているの？

—いや、全然で、個人的な理由としてはやっぱり中国ではいろんな情報の制限があるじゃん。私結構前から社会学とかに興味があつて、それ、勉強するために、

やっぱり日本の方がいいなと思って、それが多分1つの主な原因？多分。

聞き手1…高校は、中国ですか。

—そう、中国の国際学校。

聞き手1…そこでは、日本語以外、例えば英語は勉強したんですか。

—英語も勉強してきました。

聞き手1…英語も勉強できるし、日本語とか他のもできるけど、その中でも日本語を勉強して日本に来たって感じですか。

—そうね、うん。

聞き手2…他の国に留学しようとかは考えては、？

—正直、あんまり考えはしなかった。

聞き手2…社会学部だったら、それこそアメリカとかにもっといい学校があったりするから、日本じゃなくてもいいって言ったら変だけど正直、他の国でもいいのかなって思っちゃうけど、日本にしようと思った決めてみたいのはあった？

—うーん、それは、多分今はあんまり関心がないんですけど、中学生の時めっちゃアニメが好きで、それがたぶん1つのきっかけ。あまり重要ではないんだけど、やっぱりそれが始まりかなと思った。

聞き手2…実際、留学してみても日本ここのやだとかここいいとか、そういうのはある？

― やつぱり、あるは、ある。あるはあるんですけど、まあ、どの国もいいところがあってももちろん、悪いところがあると思う。

聞き手2…うん、そっか。なかなか、留学したいなと思っても、勇気が出ないというか行こうと思うのが、すごいなって、私は普通に尊敬する。

聞き手1…高校の時からずっと留学しようと思つて準備してたんですか。

― そうね。

聞き手1…どのくらい、？3年間ずっとですか？

― うん、そう。3年間。

聞き手1…どういふことをしてきたんですか。

― 日本で、私が参加した試験は、外国人留学試験っていう、基準試験で、その試験でいい点数を取るために何の準備が

必要だ。それに合わせて3年間勉強した。例えば、日本語以外には、TOFELの試験が必要で、日本に行く場合。それもちよつと勉強してきました。



聞き手2…、交換留学とかじゃなくつて、正式に立教の留学生枠で来てる感じなのか。

― そうね。

聞き手1…卒業したら立教大学卒になるってことですよ。多分。私たちと一緒に。

― うん。

聞き手2…この先日本で働こうとか、そういうのは

― まあやつぱり、日本で働くつもり。

聞き手1…高校の時は同じ高校に行つてた人も、結構他の国の大学に行きましたか。

― うん。私が通っている高校は多くの方は日本に行った。

聞き手1…大学を自分の母国じゃない国に行くのって、親とか、反対されなかったですか。

—私の場合は反対されなかったんです。

聞き手2…私は親から経済的に無理って言われちゃって、留学はしないかなって感じで短期留学とかも考えたんだけど、もう、それしたら、全部他に行けなくなっちゃうなっていう部分があって諦めた部分があったんだけど、やっぱり、両親はそういう理解っていうのは結構してくれるタイプだったのかな？

—正直、中学生の時その日は、たぶん13歳、うん。最初、実は母親からちょっと、反対とも言えないんだけど指示がもらえなくて、でも、父親が、指示してくれたってところが、多分幸いなことだった。激しい反対はなかった。うん。

聞き手1…立教大学っていう、日本の大学に来てみてよかったって思うことはありますか。

—やっぱり社会学部に入る前、社会学に対する偏見とも言えないんだけど、あん

まり、詳しくないところがいっぱいあって、実際に学ぶと社会学はこういう学問なのかっていうようにいろんな新しい考え方をもらえるとかが1つ、非常にいい部分だと思った。

聞き手1…中国にいた時と、日本に来た時で、違いを感じたことはありましたか。

—結構多くて、正直。

聞き手1…例えばどういうところですか？普通日本人の性格が、こういうところが違うみたいなのとか、社会制度とか、そういう部分ですと。

—じゃ、性格から始めよう。やっぱり、全体的に見ると、中国の人の性格と日本人の性格は似ているところが多くて、でも、全然違うところも絶対少なくないと思う。例えば、中国人の場合、その距離感の把握？それは、日本人ほど厳しくはないと思う。例えば、メッセージの返信のスピード。やっぱり、中国人同士の場合は、多分、見たら返信するっていうタ

イプ。やはり、それが日本に来て初めて日本人とメッセージでやり取りすると、その返信のスピードにちょっとびっくりはしました（笑）

聞き手1…日本人の方が遅いのですか。

—そうね、めっちゃ。

聞き手2…すごい考えてるのかな。でも、ありますよね。なんて言えばいいんだろう。駆け引きじゃないけど好きな人とか、仲いい人だと早いけど、そうでもない人を遅くするとかいう人。たまに話しても、ちよつとこの人嫌いだからほつとこうみたいな。あつたりなかつたりだけど。

聞き手1…でも、それもあるけど、ルーズ。逆に早く返信しすぎても、そしてら向こうも早く返信しないといけないから、みたいなので、友達は数日後とかに返ってくる人は多いかも。

聞き手2…なに。そんなに？！（笑）私、結構すぐに返しちゃうタイプだ。

聞き手1…でも、早い方が絶対いいと思います。

聞き手2…忘れちゃうから。(笑) やっぱすぐの方が楽？

ーうん。やっぱり外国人留学生にとって、多分そう。実際、韓国のクラスメイトから聞いて、やっぱり彼らもその日本の返信スピードにちよつとびつくりしていた。

聞き手2…あんまり気にしないで、気づいた時でいいよね。早かったら気づいた時で、遅くても普通に気づいてなかったで、別にそれぞれ生きてるからいいかなって私は思っちゃうけど。やっぱり日本人、そういうの遅いんだ。考えすぎてるのかな。そんな違いがあるなんてちよつとびつくり。

聞き手1…社会的な面ではありましたか。

ーじゃあ、例えば、制度から言うと、そもそも中国と日本の、その国家の基礎となる政策が全然違っていて。ーうん、

私は、そのところの違いを勉強するためにも日本にきた。それも多分、1つの原因であると思います。正直今の私が日本語ではなくて中国語で喋るとしてもその違いをはつきりは言えないと思う。やっぱり、多すぎるから。

聞き手1…やっぱり国によって違う部分が多いですね。それでは、法律とかではなくて、生活していて感じることはありませんか？

ーうーん、生活の中だと。例えば、病院に行くとき、日本の場合は外国人でも、留学生など一定の割引じゃないんですけど、医療保険があつて医療の面の保障は日本の方が整備されていて、中国の場合は多分、中国にいる外国人だと、その医療の保障はあるはあるんだけど、やっぱり日本のように整備されていないかなつて思いました。その他は、病院だけじゃなくて例えば区役所に行くときと中国語のスタッフがいてベトナム語が話せるスタッフもいる。でも、やっぱり中国だと多分中国語だけ話せる人がめっちゃ

多くて、そのところが結構、違うんじゃないかなと思いました。

聞き手1…うん、確かに、ありがとうございます。

聞き手2…日本つて留学生とか仕事しに来てる外国人に対して、あんまりいい制度を整えられてないみたいの部分で報道されやすかったりとか、社会学部やつてもそれが問題だみたいなのやつたりするけど、それに対してやっぱり日本つてこういうところ不十分だよねとか、そういうのは今の話聞いてるとないのかな？と思っただけどあつたりはする？

ー絶対ないとは、いえない。例えば、一つ思い出しました。例えば、外国人が、外で物件を探す時、半数以上のマンションは外国人だと、入れない。契約できません。

聞き手2…じゃあ、今つて、一人暮らし？よく寮？

―今は、一人暮らし。正直、その当時物件を探す時にはめっちゃ時間がかった。やっぱりそれは、私の立場から見ると不合理かなと思った。

聞き手2…日本に口座がないと、引き落としできないとかいう制度があったりするところもあるもんね。

―それは、そうだと思う。

聞き手1…それでは、物件は日本に来てから一人で探したんですか。

―いや、多分友達からも協力してもらって、中国語が話せるスタッフがいる不動産屋さんに行って、多分、当時は、一か月ぐらいかかった。

聞き手2…え。じゃあ、留学するって決まって、立教大学合格したってなっただけから準備期間ってどれぐらいあったのかな。

―留学生の場合、立教の合格の発表時期は、多分2月頃。

聞き手2…え。結構ギリギリじゃん?! 大変。私は、多分、2月の末だったけど、受かったとしても、立教か早稲田か。もしくは、全然違う北海道だったんだけど。だからもうマンションはこつちで押さえてた。入試の時に母が勝手に決めてきて、今住んでるところがそこだけ。

聞き手1…上京してきたんですか。

聞き手2…はい。私、栃木なので。でもさ、超大変じゃん。

聞き手1…1ヶ月とか2ヶ月で、全部一気にやんないといけない?

―私の周り今、そういう友達もいて。でも、私は多分、2021年の12月にはもう物件を探しました。当初は多分もう東京で進学するって決めていた。

聞き手1…そっかさっか。もう日本に来ることはもう決めてたから。確かに立教じゃなくても、他の大学で日本で行くかもしれないし。

聞き手2…大変。確かに受かってすぐ行かないとってなったら、本当に決められないね。それじゃあね。だから寮生が多いのかなっていう気もするけど。寮入ろうとかそういうのはなかった?

―それは多分個人的な原因。私今、結構、普段歌の練習をしているので、やっぱり外でマンションを借りた方がいいと思う。

聞き手2…中国のご実家にあるものをそっくりそのままじゃなくても、ある程度持ってきた形なの?

―いや、全然、多分、みんなは中国からいろんなものを持たないまま直接来たっていう。

聞き手2…全部買うみたいなの?

―そうね。

聞き手1…4年間だと確かに。社会学部で、他に4年間留学する正規留学の人に会ったことはありますか。

―学校だと少ないとも言えないかな。ベトナムとか。韓国。やはり、韓国、中国、ベトナムの方が圧倒的に多いと思う。うん。



聞き手1…やっぱりアジアが多いんですね。4年間正規で留学しに来てる人って異文化にはいても社会学部にはあんまりいないイメージだったから、どうなんだろうと思って。

聞き手2…確かに社会学部って留学生も少ないですよ。そもそもやっぱり日本語使って研究するってなると、ハードル高いっていう人も多いのかな。結構覚悟がないと大変なのかなっていうイメージもなくてはないかな。

聞き手1…日本に留学するためには、どういう試験があったんですか。

―一つは多分、TOFELの試験。立教だと多分60点くらいとったら英語の点数は大丈夫だと思う。そのあとは年に二回ある留学生向けの試験。

聞き手1…なるほど。それは学力ですか？それとも作文や面接試験ですか？

―文系と理系。二つに分けていて、私が選んだのは文系なので、3つの科目があ

る。一つ目は400点の日本語。200点の数学、それと200点の総合科目。社会学と政治経済、それと地理もあって幅広い学問を、浅く学ぶっていう科目。この試験が日本留学試験。

聞き手1…うんうん。面接はなかったですか？

―面接は各学校で行うという形で。

聞き手1…それでは、面接のために日本に来たんですか。

―そうですね。受けるために。

聞き手2…受験からずっとこっちにいたんですか？受験しに来て、もう一回中国に帰って、日本にもう一回、みたいな感じですか。

―いや、私が日本に来たのは、多分、2022年の8月。8月から入学するまでずっと日本にいた。6か月間。

聞き手1…その時も、別でまた物件探さ

ないといけなかったり？

―最初は日本語学校の寮に住んでいました。日本にいて、ビザを取るため、一定の期間、日本語学校で勉強することが必要。

聞き手1…その間は、中国の高校には行かなくて大丈夫だったんですか。

―うん。全然大丈夫。

聞き手2…日本の学校とか、中国の高校とかって、微妙に制度が違うと思うんだよね。大学に来ちゃうと、そこまで大きな違いは少なくなってくるかなって思うけど、単位の取得の仕方とか、進級の仕方も変わってくると思うんだけど。

―正直、高校だと全然違うと思う。やっぱり、日本との違いがめっちゃ多くて。

もし、大学の入試の場合、中国のセンター試験の場合、中国のセンター試験は高考（ガオカオ）っていう名前で、やっぱり、日本のような色々な試験の形がなくて。みんなが一つの同じ試験に参加して、

一回の試験で決めるっていう。

聞き手2…怖いよね。そう思うと日本って推薦とか、受けようと思えば何回も受けられるし、受けられる人は10校ぐらい受けられるけど

―各大学が、そのどのくらいの点数を取れるようだとその学校に進学できる可能性が高いっていう、点数の基準は一応あるんだけど、例えば、600点だどどの大学に入れるかはその点数の基準は、みんな高校に入る前から知っている人が多いと思う。

聞き手1…卒業したら、こういう仕事したいとか、大体、決まってるんですか。

―正直、私は社会学を選んだけど、やっぱり、芸術に関する仕事がしたいな。

聞き手2…日本に来て、びっくりしちゃうたみたいなことってない？

―正直、めっちゃ多くて。例えば、服装。？例えば、女の子の服装。―やっぱり

り東京の町で、歩いてみると、みんなのスタイルが結構似ているっていう感じ。正直しました。うん。それと髪型がめっちゃ似ている。それが、マジでびっくりしちゃうところだと思う。

聞き手2…中国だともうちよつとみんな自分の個性が出てる感じなのかな。

―うん、そのような比較的、町中。やっぱり、中国の地域差がめっちゃ多くて普通の都市だと、みんなは、あんまりファッションには気にしてないという感じ。でも、上海のような、多分、経済が比較的へ、発展された町だと、やっぱり、いろんな人がいるっていう。

聞き手2…確かに、日本人は流行りに乗っかってなんぼというか。目立たないためにも、みんなが身につけてるようなものをつけて、みたいな部分はあるよね。

聞き手1…確かに。流行りに乗って、逆に同じになるみたいな。

―もう一つは、マスク。最初は、コロナ

のため、みんなマスクをつけるかと思っただけ、コロナがだんだん終わり、その後もマスクをつける人がめっちゃ多くて。それも、びっくりしちやっただけ。

聞き手2…6月ぐらいまでは、とるの勇氣いましたよね。

聞き手1…全然、みんなつけていました。

—その3年間と比べればだんだん以前のように回復はしたんだけど、やっぱり経済は多くのダメージを受けたので、今、中国で生活している人の多くは生計に苦しんでいて、それが、一つの、。やっぱりコロナに関する制限が解除、されたとしても他の制限がいっぱい入っちゃって。私個人の感覚だと、中国にいたら全体の社会の雰囲気とか、そんなにゆるいことはないと思いました。やっぱり比較的厳しい感じ。

聞き手2…やっぱり人目とか気にして、？

—まあ、そうね。色んなプレッシャーもあって。例えば、大学生の就職。日本と中国と日本の就職の違いも結構多くて、中国の内定率。近年だとめっちゃ下がっていることが事実で。本当に、今の中国で仕事を探すのはめっちゃ大変なので。日本は、多分90パーセント以上の内定率。それが。一つの違い。

聞き手2…今、日本は仕事選ばなければ、本当に人手不足だから、就けるもんね。中国は職種選ばなくても結構厳しかったりする？

—正直、職種は選べる。けど、そもそも今中国ではもはや個人の意志に関係なく新しい人手が必要な会社が事実上で見るとめっちゃ少なく。

聞き手1…もし中国の人たちが、中国で就職できなかったらどうやって働いていくんですか。

—多くの人は、多分、待つ、待つだけ。他の人は、中国で正直ちょっと、特殊な

職業が多分二つあって、一つは、UberEatsとかで働いている人。

聞き手2…そういう、デリバリー関係とかだったら、就けるって感じ？

—それは、多分バイクが、あるならできる仕事なので、それをやる人がだんだん増えていて、でも、そのような人の、労働の契約もなくて、やっぱり、賃金が、めっちゃ低くて。労働時間も、10時間働いている人も多いうって印象はあるんだけど。もう一つの職場は、タクシールの運転手、それも、車があるならできる仕事なので。やっぱりその二つは今もし失業したら、多くの人が選択する職業かなと思います。

聞き手2…もう、それぐらい、仕事ないんだ。

—やはり、めっちゃ、難しいと思った。中国のトップの大学の卒業生でも、もし直接中国で就職したらやはりいい仕事も見つけることが全然できなくて、それ

に関してはいろんな記事があると思うので。

聞き手2…わざわざ就職するために、留学してる人もいるのかな。

—うん、いる。全体的に見ると人数は、多いとは、言えないんだけど。やっぱり、中国の失業のプレッシャーから逃げるための若者もいるのも事実なので。それが、多くの人の留学の原動力と言える。私はそう思っている。実際、私の周りにも、多分、24歳25歳くらいだけでも、私と同じで今立教の一年生。その人は、多分、中国のセンター試験でいい点数が取れなくて、そのままだともう人生が終わりだっという感じも彼はしました。それが、その人の留学の原動力。

聞き手1…留学生だから、授業受けるのが大変だったとか、友達を作るのが大変だったってことはありましたか。

—私個人の場合。今はあんまりペラペラ話せないんだけど、やっぱり書くとなんか

は、問題ないと思うので、単純に授業を受けるのは大丈夫だと思う。人間関係だと、知り合いがめっちゃ多くて、でもやっぱり、友達と言える人は、少ないかな。それが一つの現状。

聞き手2…やっぱり言語の違いとか、これだけペラペラだから意思疎通全然問題ないのは本当そうだと思うんだけど、ちよつとこれで友達できなくなっちゃってるみたいな感覚がやっぱりあるの？

—そうね。日本語の原因ももちろんあるんだけど、そのほかは、やっぱりみんなの共同の話題が少ないっていう。それが、正直非常に重要な問題だと思っっていて。例えば留学生の場合日本のみんなのようには日本の高校で、学んだことがなくて、日本で生活しているその経験も比較的に少なくて。初対面の中国人と日本人、二人が日本語が話せるんだけど、でも、話題がないなら、会話が進めないんじゃないかなと思った。それが、一つの壁だと思いました。

聞き手2…やっぱり、話してて何年前の音楽とかさ、何年前のドラマとかどうしてもちよこつとは出てくるもんね。でも、私もわかんないから。(笑)

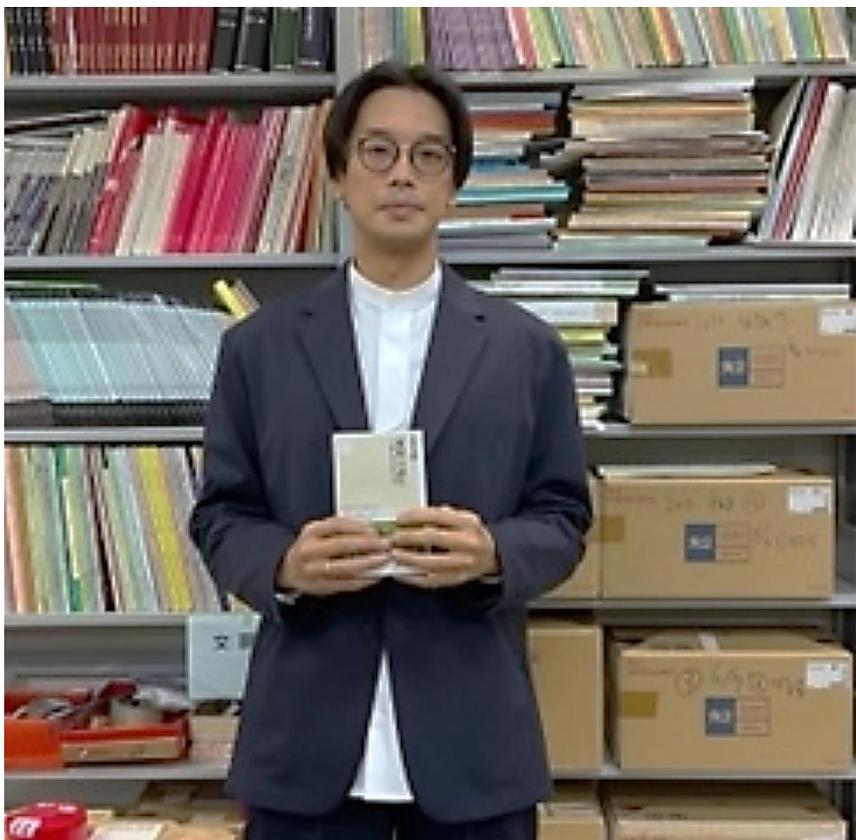
聞き手1…それは私もわかんない。(笑) ありがとうございます。

(取材…山田真凜・富澤美咲 編集…山田真凜)



教員インタビュー

— 本多真隆先生



—まず、先生の専門である家族社会学とはどのようなものなのでしょうか。

ひとことで言ってしまうえば、家族を社会学的に考える学問ということになるでしょう。よくゼミのテーマについても、家族を通して社会を見るとか、社会を通して家族を見るとか、そんな風に解説しています。家族はプライベートな世界のこと、あるいは、社会や政治と関係なくはないけど遠いものとか、離れているものと考えられやすいですが、社会構造が変わると家族のかたちとか、家族という枠そのものも大きく変わります。

僕は家族社会学ともうひとつ、歴史社会学を専門として名乗っているのですが、歴史的な視点から家族の変動であったり、それが現在どういう位置づけにあつ

たりするのかといったことを研究して
います。家族社会学の授業では、そうい
う歴史的な観点からの説明もよくして
います。

―では先生が家族社会学の研究を始め
たきっかけについて教えていただきました
いです。

普段はあまり自分の動機を言語化し
ないので、うまく説明できないです。な
りゆきでここまで来たというところも
あります。もともと大学の初めまでは理
系でした。大学受験のときに理系の学部
も受かっていたのですが、理系の道に向
いてないとも思いはじめていたので文
理融合の学部に行きました。最初の頃は
プログラミングなど情報科学を勉強し
ていたのですが、結局途中で文転しまし
た。大学二年生のときに家族社会学の授
業を受けて、その先生に惹かれてゼミに
入りました。そこで研究に興味が出て大

学院に行ったという感じですが。普通に就
活もしていました。

―元々研究者志望ではなかったのです
ね。

ぜんぜん志望していませんでした。普
通に安定した仕事に就きたいと考えて
いましたね。家族社会学にもともと興味
があったというわけでもなかったです。
このあいだ家の掃除をしていたときに、
卒業論文で使っていた資料やメモが出
てきたのですが、今と関心が違っていた
ことをあらためて思い出しました。その
ときは男性性に関する文献をよく読ん
でいましたね。『男らしさの人類学』（一
九九四年、春秋社）とか通過儀礼に関す
る文化人類学の研究や、男性性につい
てのジェンダー研究、歴史研究といったも
のを読んでいました。歴史に対する関心
はその時からありました。
もつとも、この頃はきちんと深く勉強
していたわけではなかったです。当時の
先生に卒業論文をどうするのかという

話をされたときも、あまり真面目に考え
ていなかったので、サブカルチャー、た
とえばスラムダンクといった少年漫画
などから、主人公の男の子がどうい
う風になるかについて研究すると言
いました。そしたら先生にそういう研究
は後でもできると言われて、『日本村落
社会の構造』（一九八七年、弘文堂）とい
う村落研究の本を勧められました。日本
の伝統的村落や家族の研究で、農村のさ
まざまな習俗や通過儀礼などについて
も書かれていた本でした。最初は何を考
えているのだろうと思いましたが、読ん
でみると意外と面白くて、それで家族研
究にも近づいていきました。卒論は、そ
うした文献も用いながら、戦前の教育制
度や村落の通過儀礼などを調べて、男性
がどうやって社会化されるのか、大人に
なるのかといったことを研究していま
した。

しかし当時は大学院に行こうとは考
えていませんでした。でも就活してい
てもあまり面白くなくて、いろいろ考えた
結果、大学院に行きました。見通しがつ

きにくい道に入ったので最初の頃はもの凄く後悔していましたね。大学院でも似たようなテーマでやろうと思っていたのですが、うまくいかず悩んでいるうちに、開き直って家族社会学をちゃんと勉強してみようと思うようになりました。先ほどの家研究の文献も面白かったので、戦前からの家族研究の本を色々読んでみたら、今度はだんだんと「家族」という概念の面白さに関心をもつようになりました。

たとえば「家族」という言葉は昔と今では意味が違って、まず範囲が全然違います。核家族だけでなく、サザエさんの三世代同居を指すこともあれば、非血缘者も含めて「家族」とされることもあります。あるいは、武士の一族や花柳界、近代の労働組織が「家族的」と書かれているような場面もあります。こういった記述などから「家族」という言葉の広がりに関心をもつようになり、その歴史的な変遷を研究するようになりました。

—歴史社会学も専門であるとおっしゃっていましたが。

あくまで家族社会学が軸で、家族に関するさまざまな現象や事柄、家族という概念について歴史的に跡付けているという感じです。

—先ほど文転されたというお話がありました。社会学系では文転している人が多いような気がしました。

決して少なくないと思います。社会学だけでなく、哲学の分野などでも文転した人を知っています。

もともと僕の場合は理系が特別好きというわけではなかったです。僕が高校生だった二〇〇〇年代前半は、いわゆる就職氷河期でした。文系では就職は厳しいと当時言われていたので、安定志向で理系に進んだという感じです。会社の終身雇用も崩壊しているとも言われていましたね。実際は必ずしもそんなことな

いのですけど。理系の勉強は苦手ではなかったのですが、実験室の空気がどうしても馴染めませんでした。集団で白衣を着て実験をして、というのがどうしても受けつけなくて、直前で逃げ出したっていう感じですかね。

でも今では、歴史資料の研究でずっと一日中地下にこもりっぱなしか、資料館や国会図書館に一日中いたりすることもあり、実験室で過ごしているのと実は大して変わらない生活をしている気がします。

—先生の研究は基本的には文献を用いて歴史の観点から、ということになるのでしょうか。

そうですね。文献資料がメインです。だから国会図書館に行くことも多いです。古い文献を見て、昔の「家族」や「家庭」という言葉がどのように使われていたのかといったことをさまざまな資料を見ながら研究しています。

歴史の研究は単に資料を読んでいるだけではなくて、その資料を理解するためにまたいろいろな文献を見て、ということの繰り返しです。自分が研究しているときは、資料の面白さに惹かれるままに読み進めています。ただ最近では、ちょうど一般向けに刊行する本を書いていたこともあり、どのように研究成果を社会に発信するかということもよく考えるようになりました。

たとえば、僕が育った家族とみなさんが育った家族は全然違うかもしれないし、あるいはこれから作る家族も、性別役割分業型の家族もあれば共働きの型の家族もありますよね。かつての日本では、大企業型と自営業型の家族が二大類型でした。「家族」とひとことで言ってもさまざまなパターンがあります。それら全てを「家族」という言葉で語ると多様性が一気に見えにくくなってしまう。これが普段の日常会話ならともかく、たとえばこれから家族を対象とした政策を打ち出していくときに、本当はさまざまな実態があるのに特定の家族にしか

焦点を当てていないような政策では当然機能不全になるわけですよ。

一見サポートしているようで、実は特定の家族モデルにしか貢献してないような政策も色々あります。たとえば近年の自民党は、三世代同居の推進を進めていました。三世代が住めるようにリフォームをすると、税金が一定額控除されるのかですね。なぜ三世代同居を推進するのかというと、三世代で住めば母親が祖母の介護をして、また祖父母は孫の面倒をみて、子育て支援も介護も両方うまくいくという発想からきています。

自民党の政策には高度成長期頃からこのような考え方があります。ではこうした政策がどこまで貢献するかというと、そもそも三世代同居している人たちは割と収入がある傾向にあるんです。たとえば地方の大きい家を考えてみてください。持ち家があって、そもそも豊かなケースが多かったりします。もしかしたら自民党の支持者にそういう人たちが多いのかもしれませんが、そういう人たちがばかり見ていると、当然、社会全体

が不平等になりますよね。ある特定の「家族」を想定した政策は果たしてうまくいくのかということは、現在問われているところだと思います。

「家族」という言葉のイメージが現実から乖離していると、このように「家族」について語ったりなにごとをかをしたりすることと、現実がマッチしないという問題も起こりうるわけです。言葉はそれを使う人間の発想を意外と拘束するものですから。私たちが日々使っている言葉がどのようにできあがってきて、それが現在どのように私たちの発想を制限してしまっているのか、こうしたことを示すことは、歴史研究を発信する上でも重要なことだと考えています。

もちろんこうしたミスマッチを示すことは、歴史研究に限られているわけではありません。たとえばデータを使った階層差や世帯、働き方のさまざまなパターンを示すこともあるだろうし、インタビュー調査で、ふだんなかなか可視化されないような、たとえば貧困家族やセクシュアルマイノリティの家族の実態を

示すこともあると思います。自分の場合は歴史的な視点からみると、現在流通している「家族」というカテゴリーには、こういう発想の限界があるのではないですか、みたいなことを提示することです。独自の貢献ができるのではないかと考えています。今後も「家族」という概念やそれにまつわる言説、その多様性や広がりなど、そうしたことについての研究を続けると思います。

—では統計やインタビュー、フィールドワーク的な調査は行っていますか。

インタビュー調査をすることはあります。たとえば第一生命財団から資金をいただいた共同研究のプロジェクトで、事実婚、同棲をしている人たちにインタビュー調査をやりました。実は、事実婚と同棲の区別はなかなか難しいんです。結婚はしていないけど一緒に生活しているカップルをはたからみて、事実婚か同棲かって判別できますか？

—分からないですね。

そうですね。事実婚も同棲も、法律的な結婚はしていないけれど、一緒に生活をしているという点では共通しています。インタビュー調査で面白かったのが、事実婚をしている人に聞くと、たいして「私は結婚している」って言うんです。「同棲ではなくて、私たちは結婚している」、「法律婚ではないけれど、結婚している」と。対して同棲をしている人は「自分たちは事実婚ではない」と言います。だから「いずれ結婚する」という言い方もします。もちろん全員がそうというわけではないけれど、こうした傾向が顕著だったので、共同研究者と「事実婚カップルはなぜ『結婚』するのか」(『年報社会学論集』第二八号、二〇一五年)という論文を発表しました。事実婚当事者は何をもって自分たちが「結婚」しているかと自認しているのかということも扱った論文です。人びとの主観にアプローチすることから、現在流通している

「結婚」の意味とは何かを考えた研究でもありますね。

ほかにも、団地の幼児教室の運営者にインタビュー調査したこともあります。これは自分の歴史研究とも関わっている研究ですね。現在の団地は高齢者、あるいは移民が住んでいるイメージがあるかと思いますが、高度経済成長期の頃はある意味で現在のタワマンみたいな存在で若い夫婦が多く住んでいました。けれども、急に建てたこともあって、当初は周囲に商店街や保育施設もないという状態でした。そこで住民たち、主に母親たちが自主運営の保育施設を立ち上げたのです。大半は閉鎖していますが、現在でもいくつか残っています。「家族」という枠を超えた共同性をどのように作るかということは、現在の家族社会学でも大きなテーマなのですが、こういう事例をもとに、家族を超えた助け合いや、その歴史的な文脈について研究しています。

計量的な研究のプロジェクトに参加しているわけではないですが、当然研究

はチェックしていますし、歴史研究をする上でもさまざまなデータをみます。産業構造や人口問題など色々です。

—先生の学生時代のお話をもっと聞きたいです。

— 中学高校の頃は、コンピューター部の幽霊部員でした。一番やる気のない部活のさらに幽霊部員で、たまにプログラムを組んだりゲームをしたりするくらいでした。キリスト教の中高一貫校だったので、シヤリテ委員会という奉仕活動の委員会があつて、そこに所属して募金活動や施設への訪問をすることもありましたね。そうしたことやってはいたのですが、中学高校では、ゲームセンターのアーケードゲーム、特に格闘ゲームで主に時間を潰していました。いま考えると、あまり物事を深く考えなくなかったのでしょうね。あれは基本的には反射神経の世界ですから。キリスト教の学校だから聖書なんかも読んでいて、それこそ

宗教の先生と一対一の聖書講読会なんかに参加していたのですが、正直、本を読んであれこれ考えることはあまり好きではなかったです。多分何かから逃げていたのだと思います。それが家族の問題なのか社会の問題なのか、自分でもよくわかっていません。けれどもそうした何かが積もり積もって、研究というかたちで向き合わないとだめだとなつたのが大学の最後の方だったのだろうかと思えます。

—では大学で勉強以外にやっていたことは何ですか。

何も話すことないです(笑)。

— 大学教員として教壇に立っているからあまり言いたくないのですが、正直、真面目な学生ではなかったです。最低限の単位は取るけど、あとはマンガ喫茶やゲームセンターに入り浸っていました。いま考えるとけっこう無駄に時間を過ごしていましたね。あとはアルバイトで

すかね。塾講師や試験監督などでお金を稼いで旅行とかもしていました。それもたいしたものではなく。正直、大学生という身分や大学という場所に適応できていなかったです。

—勉強以外の余暇時間が、今に影響を与えていることはありますか。

— もしかしたら何かあるのかもしれないけど、自分の実感ではあんまりないですね。それこそ大学の卒論を書くまで、本を二冊ぐらいしか読んでないんじゃないかな。教科書で部分的に読んだものはあるけど、自分で買ったのは『反社会学講座』(イースト・プレス、二〇〇四年)という社会学を批判している本と、『世界の半分が飢えるのはなぜ』(合同出版、二〇〇三年)という食糧問題についての本くらいです。あの日があつたから今があると言えればいいのですが、まだ僕は大学時代とそういう関係は結べていないです。

中三から大学三年生くらいまで本を全然読まない時期が続いていました。とはいえ学術書を全く知らなかったかというところでもなくて、母を通して現代思想やジェンダー論についての断片的な知識が入っていました。母は文筆業をしていて、家にはフランス現代思想やジェンダー論、フェミニズム、文芸評論についての本が山ほどあるんです。大学の先生の研究室に行くと、本がたくさんあってびっくりする人も多いと思いますが、僕は驚いたことがないです。母の方がたくさん文献を持っていると思っただけでした。母と家族やジェンダーについての話をすることはよくあったので、門前の小僧ではないですが、断片的な知識は入っていたと思います。それが家族社会学と親和性があったとは思いますが。仮に研究に影響を及ぼしている家族の関係があるとしたら、母親の書棚だったりするんでしょうね。

—先生の一日の生活について教えてください。

基本的に講義がない日は、家で本や資料を読んだりメモを取ったりして一日過ごしています。必要であれば国会図書館に出かけたりします。そこでコピーを取って帰ってきてそれを読んで、ご飯を作って寝て、という感じです。もちろん講義の準備などもします。

ただ、二〇二一年は本『「家庭」の誕生』(筑摩書房)の執筆にかかりつきりでした。しかもこの本は、二〇二三年四月のことも家庭庁の発足にあわせて刊行することを目指していたので、急いで書き上げなければなりません。生活も原稿の完成を優先させて、書けるときに書いているという感じでした。次の日が休みであれば、徹夜もして生活が不規則になることもありましたね。

現在は少し落ち着いてきて、教育や自分の勉強に専念しています。本を書く時に集めた資料のなかには、本に収録しきれなかったものもあるので、しばらくは

そうしたものを論文化していいのかなと考えています。いまはインプットの時期だと思って、資料のほかにもさまざまな文献を読んだり、来年担当する社会学原論の準備をしたりする時間も多かったです。最近までは卒論の対応で本当に大変でした。前任校の卒論もまだ担当していますので。

—先生が執筆された本『「家庭」の誕生』についての紹介をお願いします。

ひとことでいえば、「家庭」についてのさまざまな論者の議論を紹介しながら、明治から現在までのその移り変わりを検討した本になります。こども家庭庁の発足が決まった際に、この「家庭」という言葉を入れるか入れないかという議論がありました。当初の案は「子ども庁」だったのですが、自民党の保守的な人たちが「子どもは家庭でお母さんが育てる」ものだから「家庭」という言葉を入れるべきだという声があって、結果的に「子



『「家庭」の誕生』

ども家庭庁」になったんです。でもこの「家庭」という概念は、今だと保守的な人たちが好みそうなキーワードですが、戦前は違って、左派やキリスト教者の人たちが好んで使っている言葉でした。日本の家制度は男性家長中心で封建的、古くさいものなので、夫婦中心の近代的な「家庭」を作らなければいけないといったことを主張していたのです。そういう状況からどういう風に、私たちに馴染みがある「家庭」が社会に浸透していったのかを書きました。

—先生が現在担当していらっしゃる授業、家族社会学の紹介をお願いします。

シンプルに言ってしまうえば、近代社会における家族というものが、どのように成立して今後どうなっていくのかを解説しています。そういう見通しを提供することが基本線かなと思います。近代化、最近ではポスト工業化という枠組みです。社会変動に関する枠組みをまず説明してから、ではそうした大きな社会変動が、たとえば結婚や夫婦関係や子育て、介護の問題などにどのように現れているのか、マクロな社会変動とミクロな家族問題をどうやったら接続させて見ることができなのか、というところに注力していると思います。

—趣味を教えてください。

料理かな。池袋は手に入れられる食材も豊富で、本当に色々な料理を食べることができるので刺激になります。中華料理やイタリアンが好きですね。着任当初は池袋で外食することも多かったのですが、最近は自炊もよくやっています。

あとはサイクリング。このあいだも福井県の三方五湖を一周しました。ゲームもまだときどきやりますね。ただ最近は、スマホゲームを少しやる程度です。音楽もよく聴きます。

—先生から見た立教の社学生の印象を教えてください

今まさに掴もうとしているところですよ。授業もリアクションを見ながらやっています。立教の特徴としては、おとなしい子や要領が良い子が多いとか、よくそういう言われ方をしている、確かにそうかなと思うときもあるけれど、別にそういう特徴は立教に限らないよなとも思います。

また、社会学部は女子が多いですよ。立教の学生の気質というよりは、男女比が気になっています。女子が多いから家族社会学の授業もジェンダー系の話を少し多めにしているところもあります。もともと家族社会学は女性の方が関心の高い分野ではあるけれども、女子の比

率の多さと、学生のライフコース、将来志向の多様性にどのようなこちらも合わせていくか考えています。

―先生にとっての社会学とは何でしょうか。

小熊英二さんが何かのインタビューで「誰かが『それは社会学だ』と言えば社会学なんじゃないですか」と言っていますが、一理あるなと思います。

自分自身なぜ社会学、家族社会学をやってきたのかというと、家族社会学が面白かったという理由もありますが、自分の問題意識を何かのあたりにするときには家族社会学ならできそうと思ったことが大きいと思います。

だから、たとえばさっきの自分の卒論の話も、男性学や社会学から入っていったというよりは、自分の興味関心で行ったら男性学や社会学の文献にたどり着いたという感じでした。

たとえば、どうして男性学の文献を読むようになったのかというと、大島渚って知っていますか。「戦場のメリークリスマス」(一九八三年)とか、「御法度」(一九九九年)とかホモソーシャル的な映画も作っている人です。あとはデヴィッド・フィンチャーの「フアイト・クラブ」(一九九九年)とか。こういう映画で描かれていた男同士の関係が面白いと思って男性性についての文献も読むようになったんです。家族社会学はジェンダー論とも関係がそれなりにあるので、卒論のテーマにもしやすかった。結果的には、ジェンダー論から家族社会学に流れていきましたが。ただそれも、自分の表現したいことが社会学、家族社会学の言葉を用いればできるかもしれないと思っているところはあるかな。

ウェーバーやデュルケムといった社会学の黎明期の人たちは、法学や経済学、哲学など別の学問も学んでいて、これでは表現できない、あるいはその枠組みでは捉えきれない現実があつて、それで社会学を開拓してきたわけですよ。法学

や経済学、そういった既存の学問では対象にならない、捉えきれないさまざまな現象を把握したり理解したりするために社会学が必要で、どんどん社会学の範囲が広がってきたということですね。だから「社会学とは何か」ということにごだわりすぎなくてもいいのではないかと個人的には思っています。むしろ、自分の関心や問題意識が社会学なら表現できるかもしれないと思ったら、素直にその意志に従ってやればいいのではないかと思います。

それが社会的ではないと言われたら、「じゃあどうすれば社会学になるんですか」って聞いてみるのもいいんじゃないですか。何かのインタビューで山田昌弘さんが、日本で社会的な研究を一番しているのは官僚じゃないかと言っていましたね。官僚はさまざまデータを参照しながら、分析して、政策提言もしています。これはある意味で社会学者がしていることでもありますよね。だから、社会学者がしていることは社会学者の専売特許ではないと思いますし、誰かが

それは社会学だと言えば社会学というのは一理あると思います。社会学史の本にも、哲学者とか色々な人が混ざっていることがありますし。

もちろん一方で社会学部に所属していただきますから、社会学とはこういうものとか、デイシプリンとか体系を確立することも大事だと思っています。

もつとも学部生の段階では、社会学を学ぶことも重要ですが、むしろそれを使って何ができるのかなとか、あるいは自分の表現したいもの、言葉にしたいものは何かとか、そういうことを見つめ直してもいいのではないかと思います。それが社会学でできそうなら社会学でやればいいし、違うと思ったら法学や経済学をやってみればいいかもしれません。

僕自身、昔の本で一番インスピレーションを受けたのは政治学者や法学者が書いている本でした。とはいえそうした本に書いてあることを、現代に即して読み直すためには社会学の言葉が必要でした。

社会学にこだわらず、自分の飢えを満たしてくれそうな本にはぜひ出会ってほしいです。本に自分の知りたかったことが書いてあるとまではいなくても、刺激されるような経験はあつてほしいなと思います。

—今の立教の社学生に伝えたいことを教えていただきたいです。

社会学をうまく生かしてほしいです。先生たちも本当によく考えてカリキュラムを作っているの、社会学を体系的に身に着けてほしいというのもあるけれど、社会学をむしろ利用してほしいと思っています。先人たちも自分の関心があることや、研究しなければならぬと考えたものを、社会学の言葉や枠組みを応用して分析してきました。それが結果的に社会学のフィールドをどんどん広げてきたというところもあると思います。今後社会学はそういう風に広がっていくのではないかと思います。

自分が知りたいこと、モヤモヤしていること、社会に対して発信したいことを、社会学というツールを使えば言語化ができるかもしれません。自分が解消したいと思っている何かにぜひ社会学の言葉や枠組みを使って向かい合つてほしいです。それがまた、社会学の可能性を広げることもあると思います。

社会学の研究対象は自由なところがあるので、自分の関心から出発して、社会学の研究手法や調査倫理に乗つとつた上で、どんどん社会学の言葉や枠組みを使って社会学の可能性を広げていってほしいと思います。社会学の範囲を自身の関心から広げていってほしいなと思いますね。立教の学生に求めること、社会学部の学生に求めることはそういうことだったりします。

自分が抱えているモヤモヤや問題関心ってどこかで直視しなければならぬときが来ると思っています。それが学生時代に来るのか、社会人になって来るのか、結婚して夫婦喧嘩しているときに来るのか、高齢者になってひとり暮らし

ている時に来るのかは分かりませんが、自分がモヤモヤしているものに向き合ったり言語化したりしなければならぬときは必ず来ると思います。そこから逃げないでほしいです。

たとえば僕も学生時代に、若者の雇用が不安定化して云々とか言われて、実際その通りだけど、そんなこと言われたっでどうしようもないしという風に、不満ともなんともいえない感情を抱いていました。自分が置かれている状況なんて直視したくないですよ。だけど、そういう社会問題に直接的に目を向けるかはともかく、何かしら自分が抱えている問題意識や置かれている状況に向き合わなければいけないときは来ると思います。それが、社会学の言葉を使えば向き合えることもあるので、そこで社会学を使っしてほしいなと思います。

—ありがとうございます。

(取材・編集 中山純)



教員インタビュー

— 菅森朝子先生



● 社会学部メディア社会学科助教

● 担当授業… 社会調査法 1

社会学原論 2

基礎演習など

● 趣 味… ヨガ・登山

— 先生が研究なさっているのはどのような内容なのですか？

私はですね、領域で言うと医療社会学、あとはジェンダーの領域で研究をしています。具体的には乳がんを経験したことのある女性たちにインタビューすることを十年近くやっています。あれ十年は経ってない？（笑）*^①質的調査、インタビュー調査を中心に…。あとは*^②参与観察とか乳がんを患った女性たちの患者会という患者さん同士のコミュニティがあります。そこに足を運んで中に入っているのかなとか様子を観察したり、同じ病気の人たちが昔からの友達のように仲良くしているのは何でだろうって…。

それを不思議に思って今まで調査研究をしてきました。

* (1) インタビューや文献資料を用いた社会調査の手法。

* (2) 対象の一員となって、研究対象について観察する調査手法。

— そうなんです。ちなみに先生が研究を始めたきっかけって何ですか？

私は、みなさんと同じ立教の社会学部卒業生なんです。四年生のときに、卒論で看護師さんが患者さんとういう風にコミュニケーションを取っているのに関心を持ち、十人くらいの看護師さんにインタビュー調査をしたんですね。それが、自分の中で社会学って面白い、調査研究するのが楽しいと目覚めるきっかけになりました。でも、それに気がついたときはすでに四年生の秋学期で、もう就職先も決まっています。そこから内定を取り消す勇気はなかった

ので：（笑）まずは新卒で企業に入りました。その後、紆余曲折を経て大学院に入学したのですが、最初は研究したいテーマがなく、大学院に入ったはいいけど何を研究したらいいんだろうと迷う時期もありました。そうやっていた時、大学時代の卒論を思い出して：。見直してみたら、あ、やっぱり私はこの続きがやりたい！と思いました。ものすごく安易なんですけど、大学時代は看護師さんにインタビューしたので、次は患者さんについて聞いてみたいと思いました。医療の他に女性の生き方にも興味もありました。色々調べた結果、乳がんのことにしよう。：。「乳がん」という病気について、学生さんだとイメージがあんまりないですね。

— 確かにそうですね：。名前だけという感じでしか知らないかもしれないです

実は今、女性の九人に一人が生涯のうち乳がんにかかると言われています。

現代を生きる女性にとつてとても身近な病気です。乳がんの経験を考えるということは、医療について考えるというだけでなく、女性の生き方を考えることにもつながると思つてそれで研究をしています。もともと看護師の方にインタビューした理由は、人の命に関わる看護師の仕事はとても自分にはできない仕事だなと思つて：。でも、調査で話を聞くことならできるかなと。卒論を書くときは最初で最後の調査研究だと思つたので、せっかく調査をするんだたらあえて自分と遠い世界について調べたいと思つて、医療をフィールドに選びました。まさかその後も続けるとは思つてもありませんでした（笑）

— 今までのような理由は聞いたことがなかったのでも驚きました。先生は私たちと同じ立教大学出身ということですが、どのような学生生活を送られてから就職したのでしょうか？

普通にアルバイトしたりとかですかね(笑)塾の先生をしたり、カフェバイトしたり…。一年単位でバイトが変わった感じですね。アルバイトをしたことで他大学の人も友達になって、人間関係が広がって楽しかったです。就職してからは二社経験しました。一社目は、メディア企業で広告営業の仕事に就きました。人間関係は恵まれていたんですが、営業の仕事がどうも自分の性に合わず、これじゃないよなあと思っていました…。自分のやりたいことを考えた結果、大学院で学びたいと思うようになり、そこで上司に大学院に行きたいと相談をしたんです。仕事に直接関係ないことを学びたかったので反対されることも覚悟しましたが、仕事で結果を残してくれるならいいよと言って理解し、応援してくれました。最初の二年間は修士課程に通い、調査研究の楽しさに改めて気づいたんです。研究を続けたいと思ったので博士課程に進学し、その後企業を退職して今に至りますね。大学時代はそこまで感じていなかったんですが、社会人にな

って大学に戻ると学べる場があるってありがたいなと気がつきました。



—学生時代のアルバイトもいい体験だったんですね。ちなみにこの社会学部報が新一年生に向けたものなのですが、参与観察とかこれから学ぶことの楽しさは何ですか？

そうですね。様々なつながりの中で、全然知らない人を紹介してもらってお話しをうかがう。本来なら出会わなかったような人に調査を通して出会い、初対

面でかなり踏み込んだ深い話を聞いたり、その人の人生の話が聞けるっていうのが何より調査をしていて楽しいところですよ。でも、調査倫理の観点で、この質問を聞いてもいいものか、自分の言葉一つで相手を不要に傷つけてしまうんじゃないか？と心配になることがあります。その一方で、調査のデータ収集のためには色々聞かないといけない…。そういう難しさとかせめぎあいがあります。

—確かに難しい問題ですよ。そこは気をつけながらという感じでなかなか解決は困難ですよ。話は変わるんですが先生は立教大学に学生として入ってかから今に至るまで今と昔で社会学はどのようなところが変わったと思いますか？

今と、私が学生だった時の比較って感じがいいですかね…。私は学生の時、社会学を四年間で卒業するつもりでいた

ので、専門的な議論に積極的に触れてい
たわけではなく、社会学の変化を語るこ
とにちよつと不安があるんですが(笑)。
ただ、やっぱり社会学が対象にする「社
会」が変わってきているから、社会学が
変わってきた面があると思います。例え
ば、私が学生だった時、ジェンダーの話
は基本的に性別≡男か女で、性別役割分
業の話など男女において女性が不利な
立場に置かれているという議論が中心
だったんです。今もなおその議論は活発
ですが、性別≡男か女だけではなく、性
的マイノリティに関する議論もとても
活発です。ジェンダーの多様性や複雑さ
を捉えるっていうことが、社会学の議論
の中で普通になってきている。ほんの十
数年前は耳にしなかった LGBTQ ってい
う言葉、学会などではもちろん議論され
ていたと思うけれども、学部授業では
まだ聞いてなかったなと思います。そう
思うと、社会学が変わったというか、社
会学が対象にしている「社会」の変化を
感じますね。

—確かにそうですね。私自身は小学生
でしたが、私もその変化は最近よく感じ
ます。先生は様々な研究をその中でもさ
れていると思いますが、これから挑戦し
てみたいものはありますか？

今すでに調査をしているものですが、
がんになって、抗がん剤治療を受けると
副作用で髪の毛が抜けてしまう、爪がダ
メージを受けてしまうなど、外見が変化
することがあります。そんな時も、治療
をしながら仕事を続けている方々がい
るんです。社会と接する時に見た目のこ
とは気にする人は多いと思います。そう
いう人たちのアピランス(外見)の支
援をする美容師さんがいて、その方にイ
ンタビューをしたり、病院で行われる患
者さん向けアピランス支援のプログ
ラムを参与観察させてもらっています。
医療者でも当事者でもない美容師とい
う人ががん患者さんをサポートするこ
との可能性や難しさについて考えてい
ます。外見の問題は表層的なこととして
軽く見られがちですが、奥が深いと感じ

ています。あとはジェンダーに関して、
私自身も認識を常にアップデートさせ
ながら、次年度の授業できちんと扱いた
いなと思つています。授業は他にフィ
ルスタデイという授業があつて学生の
皆さんと一緒にフィールドに出てイン
タビュー調査を経験してもらおう授業も
担当しています。それはかなり少人数の授
業で大教室とは違うコミュニケーション
を楽しめます(笑)

—ありがとうございます。

(取材・編集 野口明日香 富田玲衣)



■ 社会学部
教員紹介

氏 名
(name)
主な担当科目

■ 社会学科

Department of
Sociology



本多 真隆 准教授
(Masataka Honda)
家族社会学



石川 良子 教授
(Ryoko shikawa)
コミュニケーショ



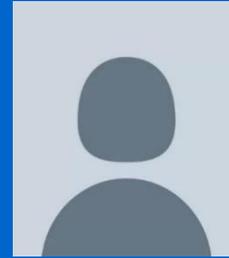
片上平二郎准教授
(Heiji Katakami)
社会学原論1ほか



李 旻珍 教授
(Minjin Lee)
専門演習2ほか



前田 泰樹 教授
(Hiroki Maeda)
保健・医療の社会学



三輪 哲 教授
(Satoshi Miwa)
計量社会学



中澤 渉 教授
(Wataru Nakazawa)
現代社会変動論



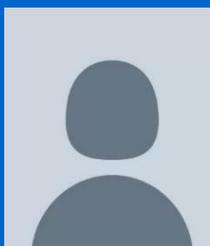
西山 志保 教授
(Shiho Nishiyama)
公共性の社会学



野呂 芳明 教授
(Yoshiaki Noro)
現代社会と政策



瀬戸 健太郎 助教
(Kentaro Seto)
労働社会学ほか



杉浦 郁子 教授
(Ikuko Sugiura)
ジェンダーの社会学



高山 真 助教
(Makoto Takayama)
質的調査法ほか

■ 現代文化学科
Department of
Contemporary Culture
and Society



石井 香世子 教授
(Kayoko Ishii)
国際社会学ほか



木村 自 教授
(Mizuka Kimura)
文化の社会理論ほか



小池 靖 教授
(Yasushi koike)
セラピー文化論ほか



小泉 元宏 教授
(Motohiro Koizumi)
アートの社会学ほか



李 雯雯 助教
(Wenwen Li)
社会調査法3ほか



水上徹男 教授
(Tetsuo Mizukami)
グローバル社会論



モライス・リリアナ
特任准教授
Global Study



大倉 季久 教授
(Suehisa Ohkura)
環境政策論



大崎裕子特任准教授
(Hiroko Ohsaki)
社会調査法1ほか



太田麻希子准教授
(Makiko Ota)
グローバル都市論



貞包 英之 教授
(Hideyuki Sadakane)
消費社会論



関 礼子 教授
(Reiko Seki)
環境社会論



高木 恒一 教授
(Koichi Takagi)
都市社会論

■メディア社会学科

Department of
Communication and
Media Studies



橋本 晃 教授
(Akira Hashimoto)
ジャーナリズム論



黄 盛彬 教授
(Seongbin Hwang)
グローバル・コミュニ
ケーション論



井手口彰典 教授
(Akinori Ideguchi)
音楽社会学



井川充雄 教授
(Mitsuo Ikawa)
メディア社会学ほか



川畑泰子 准教授
(Yasuko Kawahata)
Web スタディーズ



木村忠正 教授
(Tadamasu Kimura)
メディア・コミュニ
ケーション論



是永 論 教授
(Ron Korenaga)
メディア・テクノロ
ジー・社会



林 怡燮 教授
(I-Hsuan Lin)
ニュースの社会学
ほか



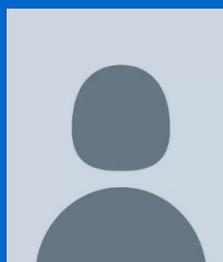
菅森 朝子 助教
(Asako Sugamori)
社会学原論2ほか



砂川 浩慶 教授
(Hiroyoshi Sunagawa)
メディア産業論



和田伸一郎 教授
(Shin-ichiro Wada)
情報社会論



金 希相 助教
(HeeSang Kim)
基礎演習ほか



(編集後記)

ここまでお読みくださりありがとうございます。今回私は教員インタビューの記事を執筆しています。また、去年は数が集まらず実施できなかったアンケート企画を実現させることができました！回答してくださった方がとうございました。アンケートの数を集めるのは大変なことだと思います。社会学部報は非常に自由な雑誌で、学生の「やってみたい！」という気持ちからスタートした企画がほとんどです。一人ではできないことも社会学部報でならできるかもしれません。私自身様々な人との出会いや経験がありました。ぜひ興味を持った方は来年の社会学部報の企画に携わっていただければと思います。最後に、インタビューに応じてくださった本多先生、企画から編集までサポートいただいた大倉先生に感謝申し上げます。(中山純)

社会学部報の編集に携わるのは2年目ですが、今年度も社会学部について新しい発見が沢山ありました。社会学部報によってみなさんの今後の学生生活がより充実したものになれば幸いです。次号は、皆さんが社会学部報

を作ってみませんか？社会学部について気になっていることがある人、新しいことに挑戦してみたい人、社会学部の友達を作りたい人など：社会学部生であれば大歓迎です！最後になりますが、インタビューやアンケートにご協力いただいた皆様、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。(黒川友菜)

私は二年間学部報に関わらせていただきました。ありがとうございます。今回は留学生のインタビューとアンケートに携わらせていただきました。学部報は自分がやりたいことを自由に作ることができる冊子であり、その中で皆さんに新しい発見や面白いと思ってくださることが提供出来たらと思っています。また、今年も表紙や挿入写真に私の撮影した写真が使われることになり、嬉しい限りです。立教大学は季節によって外観が変わり、四季を感じることが出来ます。これも学校の魅力の一つだと思っているので、目でも楽しんでいただけると幸いです。最後に、忙しくなってしまった部分もありましたが、サポートしてくださった大倉先生

に特に感謝申し上げます。関わってくれたみんなもありがとうございます。

(山田真凜)

今回の社会学部報では、様々な方々に取材に協力していただきました。改めて感謝を申し上げます。これまでインタビューをする機会があまりなかったこともあり、初めは緊張したのですが、質問を重ねるごとに話が深まっていくような感触があり、とても楽しかったです。皆さんにも楽しんでいただけたら嬉しいなと思います。留学にまつわる取材では、準備に関するお話や現地での苦勞など、実際の経験を通じたお話をたくさん聞くことができ、先生方のインタビューでは、先生の専門分野に関するお話や趣味のお話を深掘りできました。実りのある取材となったと思います。参加できてよかったです。

(富田玲衣)

今回、初めて大学に入りこの社会学部報に携わったことで、今まで授業を受けたことだけでしか交流のなかった先生とも交流することができました。大学に入学した当初は社会

学って何だろう？と疑問を持ったまま入学した学生の方が多いと思います。ですが、この社会学部報を通じて社会学とは何だろう？と知ることはまだ難しいかもしれませんが、社会学部報を通じて社会学だけでなく、今後お世話になる教授陣のことも少し知ることができるのではないのでしょうか？今後、授業で教わる先生方のことをまずは社会学部報を取って調べてみてください。そうすれば、大学の授業を、先生を知って少し、身近に感じられるかもしれません。(野口明日香)

今回私は、先輩方に就活と学生生活について、インタビューをさせていただきました。お話を伺い、自分の中に新たな視点や興味、さらには残りの大学生活を送る上で大切にしようと思う考え方を得ることができました。また、先輩と普段話しているだけではなかなか聞くことが出来ないお話も伺うことができ、とても楽しかったです。一年前、私も皆さんと同じようにこの学部報を読み、制作に携わりたいと思い参加したのですが、インタビューから編集作業まで行うという経験は、私の大学生活での貴重な財産になりました。

最後になりますが、取材に協力してくださった方、制作に携わってくくださったすべての方に、感謝申し上げます。(小口真柚)

「みなさんの学生生活がより楽しく豊かなものになりますように！」という思いで編集に携わらせていただきました。毎日食べるお昼ご飯だからこそ楽しんでほしいです。また立教大学において新たな発見に繋がってくれと嬉しいと思います。何か発見がありましたでしょうか？この冊子を手にとってくれている皆さんは立教大学に関わっている人達だと思えます。折角立教に関わったのだから皆さんの立教愛がさらにもっともっと大きくなりましょう。そして皆さんの生活がもっと楽しくなりますように。最後に編集に携わって頂いた先生方、そして編集に協力してくれた編集部のおかげとございました。

(富澤美咲)

社会学部報 | 第六号 |

二〇二四年三月発行

■ 企画・取材・執筆 ..

阿部真奈、井崎和奏、小口真柚、
黒川友菜、富澤美咲、富田玲衣、
中山純、野口明日香、山田真凜、
山本華愛

■ 発行 ..

立教大学社会学部社会学部報編集委員会
東京都豊島区西池袋三―三四―一

■ 印刷・製本 ..

ニシダ印刷製本

